

正宗蓮日

教學小辭典

編輯部教學學會創

創 會 學 會

五重玄	一九
三因仏性	二〇〇
四悉檀	二〇四
三方便	二〇五
相待妙・絶待妙	二〇六
体内・体外	二〇七
外用と内証	二〇八
依義判文	二一〇
前三・後三	二一一
立正安国論	二二三
開目抄	二二四
觀心本尊抄	二二五
十大部	二二六
大綱と綱目	二二九

三大秘法	二三
本門戒壇の大御本尊	二三
戒壇建立	二三八
末法の御本仏	二四一
人法一箇	二四六
当体蓮華	二四七
色心不二	二五〇
下種本因妙	二五一
即身成仏	二五三
主師親の三徳	二五四
久遠名字即	二五七
境智冥合	二五九
末法の觀心	二六〇
教相・觀心	二六三
受持即觀心	二六三
煩惱即菩提	二六六

第四編 三大秘法

常樂我淨……………	二七
總別の二義……………	二六
生死一大事血脈……………	二九
染淨の二法……………	二七
示同凡夫……………	二三
如来秘密神通之力……………	二三
自受用身の勝劣……………	二四
本因の境智行位……………	二五
初住位の本因と久遠元初の本因……………	二六
随縁真如の智……………	二七
本仏論の遮難……………	二六
御義口伝……………	二〇
我が身即妙法蓮華經……………	二三
直達正觀……………	二三
福十号に過ぐ……………	二三
宿縁深厚……………	二五

草木成仏……………	二六
垂迹と再誕……………	二八

第五編 信心修行

授受・折伏……………	二二
順縁・逆縁……………	二四
三類の強敵……………	二五
三障四魔……………	二七
十四誹謗……………	二九
謗法嚴戒……………	三〇
還著於本人……………	三〇
病氣の原因……………	三三
変毒為藥……………	三五
転重軽受……………	三六
五十展転……………	三七
福運……………	三八

顕益・冥益……………三〇九

不自惜身命……………三二一

有徳王と覚徳比丘……………三二四

異体同心……………三二五

如説修行……………三七

自行化他……………三八

聞法下種と発心下種……………三九

以信代慧……………三一

随方毘尼……………三三

善知識・悪知識……………三三

世法と仏法……………三四

勇猛精進……………三五

諸天の加護……………三六

魔の通力……………三七

供養……………三九

臨終の相……………三一

女人成仏……………三三

方便品・寿量品を讀誦する意味……………三三

第六編 仏教史

釈尊の一生……………三六

付法蔵の二十四人……………三七

經典の結集……………三四

中国への仏教伝来……………三四

法華經の新訳・旧訳……………三五

日本への仏教伝来……………三六

日蓮大聖人のご一生……………三八

国家諫曉……………三〇

日興上人……………三五

六老僧……………三五

二箇相承……………三七

身延離山……………三八

文以外は、法華經のためにこれを用いる。あたかも大綱を引けば、すべての綱目がそれぞれの立ち場で働きをなすようなものである。これは絶待妙ぜつたいみょうの立ち場から論ずる場合である。

日蓮大聖人が立正安国論や、そのほかの御書に、爾前の經文を引いて文証とされたのは、以上の理由によるのである。また三大秘法の建立されて以後には、法華經本迹二門はもちろんのこと、あらゆる經教がすべて大綱たる大御本尊の綱目となるのである。

觀心本尊得意抄(九七二頁) 総じて一代聖教を大に分つて二と爲す一には大綱たいこう二には綱目もうもくなり、初の大綱とは成仏得道の教なり、成仏の教とは法華經なり、次に綱目とは法華已前の諸經なり、彼の諸經等は不成仏の教なり……法華の爲の綱目なるが故に法華の証文に之を引き用ゆ可きなり。

また末法においては三大秘法が大綱となり、法華經をはじめ一切の經教がごとごとく綱目となる。

御義口伝下(七六六頁) 天台の「綱維こういを提ひぐるに目として動かざること無きが如し」等と釈する此の意なり、妙樂大師は「略して經題を挙あぐるに玄に一部を収おさむ」と、此等を心得ざる者は末法の弘通に足らざる者なり。

右の御義口伝は、常不輕品に流通を釈せられた続きの御文である。すなわち三大秘法の南無妙法蓮華經に一切を収めて、法華經本迹二門もまったく三大秘法の綱目として依用されるとの意である。

第四編 三大秘法

【三大秘法】さんだいひほう

日蓮大聖人の教義の根本は三大秘法であり、大聖人出世のご本懷は三大秘法の建立である。三大秘法とは本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目である。

末法における戒定慧を、虚空不動戒、虚空不動定、虚空不動慧といい、日蓮大聖人が三大秘法として決定された。

本門の本尊とは、日蓮大聖人が弘安二年十月十二日に御図顕の本門戒壇の大御本尊である。本門の題目とは、本門戒壇の大御本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱えて修行することである。本門の戒壇とは、本門の本尊を安置し奉って信心修行に励む場所をいう。

日蓮大聖人は建長五年四月二十八日、初めて題目をご建立になり、ついで佐渡において御本尊の開顕があり、弘安二年には本門戒壇の大御本尊を建立あそばされ、広宣流布・本門戒壇の建立は未来に遺命あそばされたのである。しかして三大秘法の依文を御書に拝するとき、

四条金吾殿御返事（一一一六頁）文永九年 五十二歳

今日蓮が弘通する法門は・せばきやうなれども・はなはだふか

し、其の故は彼の天台・伝教等の所弘の法よりは一重立入りたる故なり、本門寿量品の三大事とは是なり。

義浄房御書（八九二頁）

文永十年 五十二歳

寿量品の自我偈に云く「一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜

しまず」云云、日蓮が己心の仏界を此の文に依って顕はすなり、其の故は寿量品の事の一念三千の三大秘法

を成就せる事・此の經文なり秘す可し秘す可し。

法華行者逢難事（九六五二）

文永十一年
五十三歳

竜樹・天親は共に千部の論師ろんしなり、但ただ權大乘を申べて法華經をば心

に存して口に吐きたまわらず

此に口
伝有り

天台傳教は之を宣べて本門の本尊と四菩薩かいたんと戒壇かいだんと南無妙法蓮華經の五字

と之を残したもう。

法華取要抄（三三六二）

文永十一年
五十三歳

問うて云く如来滅後二千余年・竜樹・天親・天台・傳教の残したまえる

所の秘法は何物ぞや、答えて云く本門の本尊と戒壇かいだんと題目の五字となり。

報恩抄（三二八二）

建治二年
五十五歳

問うて云く天台傳教の弘通し給わざる正法ありや、答えて云く有り求めて云く

何物ぞや、答えて云く三あり、末法のために仏留め置き給う。

御義口伝下（七五二二）

壽量品の事の三大事とは是なり。

御義口伝下（七六〇二）

建立御本尊等の事。

御義口伝に云く此の本尊の依文とは

如来秘密神通之力

り、戒定慧かいじょうえの三学は壽量品の事の三大秘法是れなり、日蓮たしかに靈山りやうせんに於て面授口決めんじやくけつせしなり。

この三大秘法は、釈尊出世の本懷たる法華經の本門壽量品の文底に秘し沈められているのであり、同じく神

力品において付囑されている。ゆえに、

三大秘法抄（一〇二二）

ようじん

問う所説の要言ようじんの法とは何物ぞや、答えて云く夫れ釈尊初成道しよじやうどうより四味三教乃至

法華經の広開三願一の席を立ちて略開近願遠りやつかいこんげんのんを説かせ給いし涌出品ゆじゆつぽんまで秘せさせ給いし

実相証得じつそうしやうとくの当初そのかみ修行

し給いし処の壽量品の本尊と戒壇と題目の五字なり。

三大秘法抄（一〇二三）

そのかみ

此の三大秘法は二千余年の当初・地涌千界じゆせんがいの上首として日蓮たしに教主大覺世

尊より口決相承せしなり、乃至法華經を諸仏出世の一大事と説かせ給いて候は此の三大秘法を含めたる經にて渡らせ給えばなり。

三大秘法の開合

さて、このように三大秘法といっても、実は御本尊の一大秘法に収まるのである。ゆえに諸御書に「教主釈尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相伝し・日蓮が肉団の胸中に秘して隠し持てり」（南条殿御返事一五七八頁）等と仰せられている。

本門の御本尊を安置し奉り、信心・修行するのが題目であり、安置し奉る所がすなわち戒壇である。このように三大秘法は合しては一大秘法となり、さらに開いては六大秘法となる。すなわち本尊に人と法、題目に信と行、戒壇に事と義がある。

人の本尊とは久遠元初の自受用身たる日蓮大聖人であらせられ、法の本尊とは文底下種事行の一念三千の南無妙法蓮華經である。人法に開くといっても人即法、法即人で而二不二であらせられる。題目とは御本尊を信じ奉り唱題・折伏することであり、すなわち信・行に開かれる。

信のない行は盲が千里の道をくわだてるようなものであり、行のない信は跛が千里の道をくわだてるようなものである。いずれも目的を達することはできない。すなわち信・行に開くといっても、二にして、しかも一である。

また戒壇には事と義がある。文底秘沈抄に「夫れ本門の戒壇に事有り義有り、所謂義の戒壇とは即ち是れ本門の本尊所住の処・義戒壇に当る故なり……事の戒壇とは一閻浮提の人懺悔滅罪の処なり但然るのみに非ず梵天帝釈等も来下して踏みたもうべき戒壇なり」とある。

ほんもんかいだん だいごほんぜん
【本門戒壇の大御本尊】

末法に日蓮大聖人の建立あそばされた御本尊は、つぶさに観心本尊抄にお示しの大曼荼羅である。

観心本尊抄（二五四頁） 此の時地涌千界出現して本門の釈尊を脇士と為す一閻浮提第一の本尊此の国に立つ可し。

右にお示しのとおり、弘安二年十月十二日に建立の本門戒壇の大御本尊が、末法は一切衆生即身成仏の御本尊である。すなわち日蓮大聖人は聖人御難事（一一八九頁）に「余は二十七年にして出世の本懷を遂げた」と仰せあそばされたのである。

この本尊に人と法とがある。人とは久遠元初の自受用身即日蓮大聖人であらせられ、法とは寿量文底下種事行の一念三千の南無妙法蓮華経である。人法といえども即一箇であり、一念三千即自受用身・自受用身即一念三千であらせられる。日蓮大聖人は当時の宗教界が本尊に迷っている状態を、次のように仰せられた。

開目抄下（二一五頁） 而るを天台宗より外の諸宗は本尊にまどえり、俱舎・成実・律宗は三十四心・断結成道の釈尊を本尊とせり、天尊の太子が迷惑して我が身は民の子とをもうがごとし、華嚴宗・真言宗・三論宗・法相宗等の四宗は大乗の宗なり、法相・三論は勝応身ににたる仏を本尊とす天王の太子・我が父は侍と・をもうがごとし、華嚴宗・真言宗は釈尊を下げて盧舎那の大日等を本尊と定む天子たる父を下げて種姓もなき者の法王のごとくなるに・つけり、浄土宗は釈迦の分身の阿弥陀仏を有縁の仏とをもうて教主をすて

たり、禪宗は下賤の者・一分の徳あつて父母をさぐるがごとし、仏をさげ經を下す此皆本尊に迷えり、例せば三皇已前に父をしらず人皆禽獸きんじゆうに同ぜしが如し。

また、諫曉八幡抄（五八四頁）には「これいまだ道理有りて法の成就せぬには本尊をせむるという事を存知せざる者の思いなり」とて、現実に大衆を幸福にすることのできない場合は、その信仰している本尊を責めるべき道理を明かされている。

しこうして末法の今日、われら凡夫は何を本尊とすべきかについて、

本尊問答抄（三六五頁）問うて云く末代惡世あくせの凡夫は何物を以て本尊と定むべきや、答えて云く法華經の題目を以て本尊とすべし……不空三藏ふくそうの法華儀軌ぎぎは宝塔品ほうとうの文によれり、此れは法華經の教主を本尊とす法華經の正意にはあらず、上に挙ぐる所の本尊（法華經の題目）は釈迦・多宝・十方の諸仏の御本尊・法華經の行者の正意なり……本尊とは勝れたるを用うべし。

本尊問答抄（三六六頁）問うて云く然らば汝いかん云何ぞ釈迦を以て本尊とせずして法華經の題目を本尊とするや、答う上に挙ぐるところの經釈を見給へ私の義にはあらず釈尊と天台とは法華經を本尊と定め給へり。

ここに仰せられる法華經の題目とは、寿量文底下種三大秘法の南無妙法蓮華經にほかならないのである。種脱相對、第三法門、三大秘法等の項で論ずるごとく、日蓮大聖人の終窮究竟しゆうきうきゆうきやうの極説は實にここにある。「本尊とは勝れたるを用うべし」のお言葉をよく拝するならば、内外相對ないげや權實相對のうえに立つ釈尊を本尊とすべき理由がないのである。三大秘法の御本尊とは、

觀心本尊抄（二四七頁）其の本尊ていたらくの為体本師の娑婆の上に宝塔空ほうとうに居こし塔中たつちゆうの妙法蓮華經の左右に釈迦牟

尼仏・多宝仏・釈尊の脇士上行等の四菩薩・文殊弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し迹化他方の大小の諸菩薩は万民の大地に処して雲閣月卿を見るが如く十方の諸仏は大地の上に処し給う迹仏迹土を表する故なり。

日女御前御返事（一二四三） されば首題の五字は中央にかかり・四大天王は宝塔の四方に坐し・釈迦・多宝・本化の四菩薩肩を並べ……総じて序品列坐の二界八番の雑衆等一人ももれず、此の御本尊の中に住し給い妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる是を本尊とは申すなり。

以上のように三大秘法の御本尊は明々赫々たるにもかかわらず、大多数の日蓮宗各派は釈尊を本尊として本仏とあおいでいる。その邪見は実に根強いものであるが、いま、次の両文を引いて彼等の曲解を批判し、もつてその邪義を叱正しよう。

報恩抄（三二八） 答えて云く一には日本・乃至一閻浮提・一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の釈迦多宝・外の諸仏・並に上行等の四菩薩脇士となるべし。

三大秘法稟承事（一〇二二） 寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり。

これらの御文に「教主釈尊」とあるのをみて、釈迦本尊を立てるのは、実に迷論の至極である。報恩抄に仰せの「教主釈尊」とは「南無妙法蓮華經をご所持あそばされている仏」の意で即日蓮大聖人であらせられる。もしインド応誕の釈迦仏ならば、それは多宝と共に脇士となっているではないか。また三大秘法抄に仰せの「本有無作三身の教主釈尊」もまったく同意である。なぜかとなれば、次に引く御義口伝を心して捧すべきで

ある。

御義口伝下（七五二頁）　されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり。

御義口伝下（七五九頁）　自受用身とはほしいままにうけもちるみ一念三千なり、伝教云く「一念三千即自受用身・自受用身とは尊形そんぎようを出でたる仏と・出尊形仏とは無作の三身と云う事なり」云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり云云。

御義口伝下（七五九頁）　久遠とははたらかさず・つくろわず・もとの儘ままと云う義なり、無作の三身なれば初めて成ぜず是れ働かざるなり、卅二相八十種好を具足せず是れ繕つくろわざるなり本有常住の仏なれば本の儘ままなり是を久遠と云うなり。

御義口伝下（七六〇頁）　本尊とは法華經の行者の一身の当体なり。

末法における本尊とは法華經の行者たる日蓮大聖人の一身の当体である。釈尊は実にこの三大秘法を修行してこそ成仏したのである。

三大秘法稟承事（一〇二二頁）　問う所説の要言の法とは何物ぞや、答て云く夫れ釈尊……実相証得の当初修行し給いし処の寿量品の本尊と戒壇と題目の五字なり。

すなわち三大秘法の御本尊とは、釈尊自身が成道以前に題目を唱えて修行した御本尊であらせられるのである。かくのごとく、日蓮大聖人の仏法の根本は三大秘法であり、三大秘法の根本は日蓮大聖人が一切衆生を救われるため出世の本懐ほんかいとして、弘安二年十月十二日建立された本門戒壇の大御本尊である。この大御本尊は、

現在まで日蓮正宗富士大石寺に、清純に伝承されており、本門戒壇建立の時には、本門戒壇に安置されるべき大御本尊である。

日蓮大聖人は御一代の間に幾つかの御本尊をお認めになり、それぞれ信心に励む出家の弟子、在家の檀那に授けられている。その御本尊を一機一縁の御本尊といい、日蓮大聖人滅後において、第二祖日興上人は、大本門寺建立の時には本門戒壇の大御本尊のもとに結集されるべきであると命ぜられている。

弘安二年十月十二日、日蓮大聖人は、当時ひき起こされていた熱原あつはらの法難を機会として、日興上人の指導する熱原地方の信者の強信さをたたえつつ、出世の本懐達成の時として、本門戒壇の大御本尊を建立された。この本門戒壇の大御本尊は、一機一縁の御本尊とはその意味が異なり、末法万年のほか未来永遠の一切衆生が、ことごとく帰依して即身成仏の大功德がえられる大御本尊であり、一閻浮提えんぶだい（世界）の衆生に与えられた大御本尊である。日蓮大聖人は、この本門戒壇の大御本尊を建立になり、第二祖日興上人に付嘱されたことが、出世の本懐であらせられた。

聖人御難事（一一八九） 去ぬる建長五年太歳四月二十八日に安房あわの国長狭郡の内東条の郷・今は郡こおりなり、

天照太神の御くりや右大将家の立て始め給いし日本第二のみくりや今は日本第一なり、此の郡の内清澄寺と申す寺の諸仏坊じぶつどうの持仏堂じぶつどうの南面にして午うまの時に此の法門申しはじめて今に二十七年・弘安二年太歳なり、仏は四十余年・天台大師は三十余年・伝教大師は二十余年に出世の本懐を遂げ給う、其中の大難申す計りなし先先に申すがごとし、余は二十七年なり其の間の大難は各各おのづかかつしろしめせり。

日蓮正宗二十六世、学匠日寛上人にちかんは、観心本尊抄文段に、本門戒壇の大御本尊建立の不思議について、次の

ように述べている。

観心本尊抄文段（富要四卷二一九頁） 智者大師は隋の開皇十四年御年五十七歳、四月二十六日より止観を始め、一夏にこれを説き、四年後同十七年御年六十歳、十一月御入滅なり。わが大聖人は、文永十年四月二十五日当抄を終り、弘安二年御年五十八歳、十月十二日に戒壇本尊を顕わし、四年後弘安五年御年六十一歳十月の御入滅なり。これに三事の不可思議あり。一には、天台大師は五十七歳に止観を説き、蓮祖大聖は五十八歳に戒壇の本尊を顕わす。また天台は六十歳御入滅、蓮祖は六十一歳御入滅なり。是れ則ち像末の教主の序、あに不思議にあらずや。二には、天台は四月二十六日に止観を始め、蓮祖は四月二十五日に当抄を終る。天台は十一月御入滅なり、蓮祖は十月御入滅なり。蓮祖後に生まれ給うといえども下種の教主なり、故に義前にあり、この故に蓮祖は二十五日に当抄を終り十月の入滅なり。天台は前に生まれ給うといえども熱益の教主なり、故に義後にあり、この故二十六日に止観を始め、十一月の入滅なり。種熟の序あに不思議にあらずや。三には、天台蓮祖同じく入滅四年已前に終窮究竟の極説を顕わす、むしろ不思議にあらずや。

また日寛上人は「なかんずく弘安二年十月十二日の本門戒壇の大御本尊は、究竟中の究竟、本懷の中の本懷なり、すなわちこれ三大秘法随一なり、いわんや一閻浮提（世界）総体の大御本尊なるがゆえなり」（富要四卷二二一頁）といわれている。さらに、日寛上人は、本門戒壇の大御本尊の功德について「是れすなわち諸仏諸經の能生の根源にして、諸仏諸經の歸趣するところとなり、故に十方三世の恒沙の諸仏の功德、十方三世の微塵の経々の功德、皆咸く此の文底下種の本尊に帰せざるなし、譬えば百千枝葉同じく一根に趣くが如し、故に此の本尊の功德は無量無辺にして、廣大深遠の妙用有り、故に暫くも此の本尊を信じて南無妙法蓮華經と

唱うれば、則ち祈りとして叶わざるなく、罪として滅せざるなく、福として来らざるなく、理として顕われざるなきなり。妙樂の所謂『正境に縁すれば功德多し』は是なり」（富要四卷二一三頁）と仰せられている。

このようなすばらしい三大秘法の大御本尊が、七百年の昔から日本の国に厳存し、しかも、今日では日蓮正宗富士大石寺の奉安殿に安置されている。不幸に悩む人々、よりよき社会を現出させようという人々は、一日も早くこの大御本尊を信じたてまつり、自分自身の幸福と社会の繁栄を期すべきである。

大御本尊への疑難を破す

末法の御本仏日蓮大聖人が、弘安二年十月十二日、一閻浮提総与の本門戒壇の大御本尊をご建立あそばされて、出世のご本懐を遂げられたことは、厳然たる事実である。しかるに、日蓮宗各派では、そのことについて「日蓮大聖人や日興上人や、そのほか古い記録には何も書いていない。日蓮正宗第九世の日有上人が偽作したものだろう」というような、種々の悪口をいつている。これらの疑難を、ここで、まとめて破折しておきたい。

まず反問するが、もし本当に日蓮正宗が本門戒壇の大御本尊を偽作した宗教だったとしたら、日蓮大聖人の教えは一体どこにあるだろうか。仮に身延派の稻荷や竜神、また中山派の鬼子母神等を正統の日蓮宗と考えるならば、それはかえって大聖人のご意思に反している。なぜなら、大聖人の仏法の肝要は南無妙法蓮華經であり、畜生界を本尊とせよとは仰せになっていないからである。日蓮大聖人の御本尊は多くあるが、それぞれ脇書があって「だれだれに授与する」とか「どのような目的で、これをしたためた」等と書かれている。なるほど弘安二年に本門戒壇の大御本尊を顕わされたという、そのとおりの御書はない。しかし現存するほかの御本尊でも、御書にいつお書きになったなどとあるものは、ほとんどなく、御本尊はその脇書が重大なのである。

弘安二年の本門戒壇の大御本尊は、日蓮大聖人のご真筆で「本門戒壇也、願主弥四郎国重等」と、はっきりおしたためになっていて疑う余地はない。

次に御書にはなくても、日昭・日朗などの五老僧が知らないわけではないという。ところが、それは、一般の常識的な考えであって、当時の実情を知らない者のいうことである。六老僧といえ、いかにも立派に聞こえるが、常随給仕をされた日興上人を除く五人は、それぞれ地方に在住しており、しかも当時は題目流布が中心であつた。したがって真の本尊論も理解できず、日蓮大聖人の滅後にすぐ天台の弟子だといひはじめ、本尊は釈尊だなどといっているくらいであるから、話にならない。

日興上人は、日目上人に対する御相承書すなわち「日興跡条条の事」（富要五卷三一頁）には「日興が身に充て給わる所の弘安二年の大御本尊」を日目に相伝すると仰せられている。これこそ日蓮大聖人から身にあてて賜たまわられた、弘安二年の本門戒壇の大御本尊である。しかも「日興跡条条の事」は日興上人の正副二通の疑う余地のないご真筆が厳然げんぜんと富士大石寺に存在するのである。

身延派の批判では、この御相承書の弘安二年の本尊は、現在大石寺でいう本門戒壇の大御本尊ではないという。そのわけは「弘安二年の板まんだら」といっていないからだという。これはいかにも身延流の考え方で、現在の身延派は、本尊がなんだかわからない。いちいち紙曼荼羅まんだら、板曼荼羅、稻荷、鬼子母神きしもじん、釈尊の仏像などといわなければ、ただ本尊といわれてもわからない。そんなところから、日興上人の御付嘱状を疑い、非難しているが、富士大石寺で御本尊といえ、昔から今日まで、南無妙法蓮華經の大曼荼羅に決まりきっている。弘安二年の大御本尊といえ、本門戒壇の大御本尊と決まっているのである。身延派の頭で大石寺をみる

から、そのような愚論をいうのである。

日蓮宗各派で本門戒壇の大御本尊について述べたのは「当家諸門流継図の事」が最も早い。しかし、この書は作者、年代ともに未詳であり、内容から、文禄、慶長年間に身延派の僧が書いたものといわれる。これには「日興上人が板本尊と御影像みえいざうを盗んで身延から逃げ出した」と悪口をいっている。この書の日興上人身延離山に関する記録は、まことにデタラメなことで定評がある。しかし、これは本門戒壇の大御本尊についての悪口ではなく、かえって、本門戒壇の大御本尊が知られていたことの証明になるのである。後に、日憲という僧が、この書に追い書きして、富士大石寺に参拝して大御本尊にお目通りしたと云って、そのお姿を述べているが、そうとうに誤あやまって見て見るにたえない。しかし、これとても大御本尊の悪口ではない。このほか、戒壇の大御本尊を彫刻けいこく申し上げた日法上人の玉沢門流では、古くから本門戒壇の大御本尊の悪口をいって、日蓮大聖人の御文字を削りけずとった木屑くせつの方は、わが玉沢にありなどという低級なことをいっていた。これも、かえって本門戒壇の大御本尊が厳然げんぜんと顕あらわれた証明になるのみである。

次に、日有上人の偽作説について、いったい、いつ誰がいい始めたのであろうか。それは、驚くなかれ、明治時代になってからである。まず日有上人に対する悪口は、北山の日浄・日専に始まるといわれている。

日有上人のご入滅は文明十四年（日蓮大聖人滅後二〇一年）で、その後、日浄・日専らが「有師は癩病で死んだ」等と悪口した。それから約百年の後、要法寺の日辰にっしん（天正四年、日蓮大聖人滅後二九五年）と房州保田ほた妙本寺の日我（天正十四年、日蓮大聖人滅後三〇五年）の二人が、これについて述べた記録があるから、比べてみよう。

まず日辰の祖師伝には「日辰が重須おもす（北山）にいた時、東光寺の僧がやってきていうには、大石寺の第四世日道は、佐渡で日代の本尊を焼いたら、癩病になって河内の杉山に隠居いんきょした。第九世日有も癩病になり、第十二世日鎮は狂気になり、現在の十三世日院は中風を病み痴人のようになった」と。日辰は大石寺日院上人に、通交したいと申し入れ、拒絶きよぜつされたのでその腹いせに、大石寺の有名な法主上人を皆、バカだ、中気だ、癩病だと書いたのである。しかし、本門戒壇の大御本尊に対する悪口は、一言もいっていない。

次に日我は、観心本尊抄抜書に「久遠寺の板本尊今大石寺にあり、大聖御存日の時造立なり」といっている。この日辰と日我はほぼ同時代の人で、共に大学者といわれた人であるが、同じ一つのことをぜんぜん反対に書いているのである。どちらかといえば、日辰のほうは日尊の流れであるから、そんなに大石寺を目のかたきにしなくてもよさそうな立ち場である。日我のほうが日郷の流れであるから、敵対の立ち場であるが、事實は反対の立ち場でみていることも、おもしろい対照である。

そして、日辰と同じ要法寺の日陽は、祖師伝付録そしでんふろくに元和三年（日蓮大聖人滅後三三六年）に大石寺を訪れて「日本第一の板本尊」を拝したと、感激して書いている。

さらに同じく要法寺の三妙院日王、講題某に送る書にいわく「大石寺宝蔵に安んじ奉たてまつる戒壇の大御本尊は最も大切に……本門寺建立の時には本堂にかけ奉る大御本尊なること異論なし」と。

これらは、いずれも、日蓮大聖人滅後三百年ないし三百四十年ぐらいの人々の記であり、富士大石寺に大御本尊あり、との事実を、ありのままに認めているのである。

その後、日寛上人（日蓮大聖人滅後四四五年）が著述なされた対邪宗問答の「末法相應抄」にせよ「当流行

事抄」にせよ、本門戒壇の大御本尊について疑難のなかったことを証明している。また「本迹問答十七条」(日蓮大聖人滅後二百年ごろ)「辰春問答」(滅後二五〇年ごろ)「破七兵衛之邪問書」(滅後五五〇年ごろ)「砂村問答」(滅後五五〇年ごろ)においても、同じく方便品・寿量品法華經一部の読不読、さらには、本迹一致か勝劣か、造仏像の要不要などを論じているのみで、戒壇の大御本尊に対する邪難は、一つも見うけられないのである。

このように、日我、日陽、日王の言、また、その前後における対邪宗との問答の内容をみるに、その当時は、大石寺にごく近い北山あたりの邪説を除いては、一般に、本門戒壇の大御本尊について、疑難をさしはさむ余地がなかったと思われる。

しかるに日蓮大聖人滅後五百六十六年、徳川末期の嘉永二、三年ごろ行なわれた「勝地論」では、初めて本門戒壇の大御本尊に対する疑難が現われてくる。この「勝地論」と同じ年、あるいは、前後して行なわれた対邪宗との問答である要法寺日生の「大石破門一二三」(「勝地論」と同年の嘉永三年)「破愚邪正立論」(同じく嘉永三年)要法寺の智伝日誌(後の玉野日志)の「破石金剛論」(嘉永四年)にも、同じく「戒壇の板本尊と一機一縁の本尊」についての邪難が述べられている。もちろん、これらの邪難に対しては、当時の先師が完全に破折を加えているのは申すまでもない。

本門戒壇の大御本尊に対する邪難が、本格的に起こってきたのは、明治十一年末、北山本門寺住職の玉野日志なる者が、日蓮正宗第五十五世日布上人に対し、書簡をもって、本門戒壇の大御本尊についての邪義をかまえてきたことに始まる。

玉野日志は、もと要法寺の僧であったが、驕才きょうさいを認められて、滅亡に瀕ひんした北山本門寺に迎えられ、売名のために問答をもちかけたのである。玉野日志の論難は、日霑上人にちでんがすべて大破折を加えられ、玉野日志は大敗北を喫した。結果、自らの非をさとして、本門戒壇の大御本尊に対する虚妄こもうの説をわびている。しかし、その後いくばくもなく、明治十五年、五十歳で死去して、すべては終わった。ここに、戒壇の大御本尊に悪口をいう根拠も理由も何もなくなったわけである。

日辰の祖師伝には、有師癩病らいびょうとあるが、もちろんそのような事実はない。しかも戒壇の御本尊を板に彫刻したとは書いていない。日志はこれを結びつけて、日有上人は戒壇の御本尊を板に彫ったため、癩病になったとまことしやかに書いている。さらに日志の新説は、江戸時代末に、久遠院使妙べんみょうが友だちに話した言葉だということで、大石寺にある戒壇の御本尊を日有上人が彫刻ちようこくしたと書いている。まことに「死人に口なし」で、お話にならない。

ところが、その後、すでに鎧袖一触がいしゅうしよくに破折しつくされた玉野日志の悪口を、性こりもなく持ち出したのが、明治年間では、横浜問答で破折された国柱会の田中智学、顕本法華宗の本多日生、身延派の清水竜山、さらに清水梁山等であるが、あまりたいしたことはなく、いずれも日蓮正宗側から徹底的に破折されている。

昭和の代となり、日蓮正宗創価学会が正法広布の大前進を開始して、昭和三十年三月十一日、かの有名な小樽問答で邪宗身延派を完全に打ち破ったことによって、身延派は滅亡の退勢挽回たいせいばんかいをはかり、身延派の学者を動員して「創価学会批判」なるものを発行し、本門戒壇の大御本尊の悪口をいった。

ところが、まことに驚きあきれたことには、それはすべて破折しつくされた玉野日志の悪口のむしかえしに

すぎないものであった。心あるものの嘲笑^{ちやうしやう}をかい、さらに創価学会の「創価学会批判の妄説を破す」によって大破折を加えられ、完全に沈黙^{ちんもく}してしまった。

「創価学会批判」のなかで、彼らは、日憲の説をうのみにして、勸請形式^{かんじよう}（身延派あたりは好んで勸請という）なるものを持ち出したが、日憲が大きな間違いをおかしているので、まったくお話のほかであった。そのほか「卑賤^{ひせん}な弥四郎国重が願主であるのはおかしい」等の疑難があったが、釈迦在世においてすら、寿量品を發起した弥勒菩薩^{みろくぼさつ}が、文殊等と比較^{ひかく}にならない低位であることを忘れてはならない。大勇猛心をもって死身弘法の任にあたる弥四郎国重が願主で、その本門戒壇の大御本尊が第二祖日興上人に付嘱されたのに、なんの不思議とすることがあろうか。そのほか、まったく論ずるに足らないみじめな論難であった。

その後、同じ悪口を繰り返しているのが、仏立宗の田中日広とか、顕本法華宗の窪田哲城、身延にやとわれた顕本の長谷川義一、身延派の石川泰道、星野日亮、国柱会の田中香浦、高田聖泉、本化妙宗連盟の高橋智遍等である。内容はすべて身延の「創価学会批判」よりも低級なるものでまったくお話にならない。

特に、前立正大学教授であった身延派の安永弁哲は「板本尊偽作論」を著^あわしたが、その誤^{あやま}れる邪説を追及され、謝罪文を新聞に発表して逃げて行くえをくりますという醜態^{しゆうたい}を演じた。これは、歴代管長への悪口を並べたもので、身延派のなかでも批判されているようなしろものであるが、悪口のためのロジックがひどすぎるので、日蓮正宗布教会では、同年九月「悪書板本尊偽作論を粉碎す」を発行して破折を加えている。

とにかく富士大石寺には本門戒壇の大御本尊が厳然^{げんぜん}とおわしまし、その偉大な功德とご威光^{いこう}によって、創価学会は六百数十万世帯と全世界に大発展をしているのである。

すなおに信心して大利益をうける者と、あいかわらずとるにたらない非難・攻撃をして、無間地獄に沈むものとの現実の証拠はどうにもならないことを知るべきである。

【戒壇建立】

戒壇とは戒を授ける壇場である。仏法に帰依し、その教えを信じ行ずる者が、定められた戒律を受持することを誓う場所である。

小乗戒・大乘戒・法華經迹門の戒などがあり、壇の形式もさまざまである。しかるに、日蓮大聖人の仏法でいう戒壇は、釈迦仏法で説く戒壇とは、根本から意義を異にしている。

つまり、三大秘法總在の大御本尊が安置され、全人類を救う根本道場として、広宣流布の時、建立される事の戒壇をいうのである。

まず、過去における戒壇建立をみると、インドにおいて、釈迦成道十年、周の穆王十三年の時、摩訶陀国、弗迦沙王のために法を説き、そのとき、楼至菩薩の請願によって祇園精舎の外院の東南に建立したのが、戒壇の起こりである。

仏祖統記（宋志磐撰五十四卷）第三に「仏祇園の外院の東南に戒壇を建立せしむ地より立ちて三重を相となしもって三空を表す。帝釈また覆釜を加えもって舍利を覆う大梵天王無価の宝珠をもって覆釜の上に置くこれを五重となし五分法身を表す云云」とある。

また、中国における戒壇建立の最初は、仏教渡漢後三六八年、劉宋の文帝元嘉十一年（四三四年）に、罽賓けいひん国（大月氏の南方、いまの北インド・カシミール地方）の沙門・求那跋摩くなばつまが、南林寺に戒壇を建て、僧尼のために授戒をしたときが最初である。

次に、大乘戒壇においては、唐の代宗の永泰元年（七六五年）、大興善寺に方等の戒壇を建て、都の僧尼に勅令を発し、臨壇大徳各十人を置いた。これが大乘教の戒壇の初めで、以後、唐・宋の時代に、數十か所の戒壇が建立された。

わが国においては、第三十代欽明天皇きんめいの十三年（西紀五五二年）仏教が伝来し、その後、第四十六代孝謙天皇の勝宝六年（西紀七五四年）、勅を奉じて入唐した日本の学僧・栄叡、普照と共に、唐僧・鑑真が来朝し、東大寺に小乗の戒壇を建立した。

ついで、唐招提寺に戒壇を建立し、天皇、上皇、后妃および百官を登壇させ、授戒した。以後、下野（栃木）の薬師寺、筑紫（福岡）の観世音寺に戒壇が設けられ、天下の三戒壇と称した。

また、比叡山迹門の戒壇は延暦二十四年（西紀八〇五年）に、唐僧・道邃どうすいより大乘円頓戒をうけて帰朝した伝教大師が、翌年二月、叡山において弟子一百余人に大乘円頓戒を授け、円頓戒壇建立を朝廷に奏請し「顕戒論」二巻を著わし、その必要性を説いた。

伝教大師の願いは、存生中には達せられず、滅後わずか六日目、つまり弘仁十三年（西紀八二二年）六月十一日、大乘戒壇建立の許可が下りた。比叡山上における授戒は、翌年四月に行なわれ、初めて迹門理の戒壇が建立された。これらわが国の戒壇建立は、東大寺の戒壇、迹門の延暦寺の戒壇と共に、勅命によって建てられ

たのである。

末法の本門戒壇建立とは、化法である題目の流布、本尊建立とは異なり、具体的な化儀の広布に属する問題である。

この事の戒壇は、絶対唯一の大御本尊のましますところであり、したがって最勝の地を選んで戒壇を建立すべきなのである。

文底秘沈抄に「靈山浄土に似たらん最勝の地とは、まさにこの富士山なるべし、ゆえに富士山において本門の戒壇これを建立すべきなり」とある。

富士こそ日本一の名山であり、不思議にも御本尊の名号と等しく、古来から大日蓮華山と称していたのである。

したがって日興上人の門徒存知の事にも「凡そ勝地を撰んで伽藍を建立するは仏法の通例なり、然れば、駿河国・富士山は是れ日本第一の名山なり、最も此の砌に於て本門寺を建つべきなり」とあり、また三位日順の詮要抄にも「天台大師は漢土天台山においてこれを弘宣す、かの山名を取って天台大師と号す、富士山または日蓮山と名づく最もこの山において本門寺を建つべし、彼は迹門の本寺、これは本門の本山なりここに秘伝有り」とある。

この戒壇建立の地については、身延派などが、大聖人が九か年住まわれたことをよりどころにしたり、「かかる不思議なる法華經の行者の住処なれば争か靈山浄土に劣るべき」という御文をたてに、身延戒壇建立などといっているが、いたずらに謗法と化した身延は「法妙なるが故に……所尊し」という道理に反するものである。

三大秘法抄（一〇二三頁）に、

「叡山に座主始まつて第三・第四の慈覺・智証・存の外に本師伝教・義真に背きて理同事勝の狂言を本として我が山の戒法をあなづり戲論とわらいし故に、存の外に延暦寺の戒・清淨無染の中道の妙戒なりしが徒に土泥となりぬる事云うても余りあり歎きても何かはせん、彼の摩黎山の瓦礫の土となり梅檀林の荆棘となるにも過ぎたるなるべし」

とある御文からも明瞭であろう。

更に三大秘法抄（一〇二二頁）に、

「戒壇とは王法仏法に冥じ仏法王法に合して王臣一同に本門の三秘密の法を持ちて有徳王・覺徳比丘の其の乃往を末法濁惡の未来に移さん時勅宣並に御教書を申し下して靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立す可き者か時を待つ可きのみ事の戒法と申すは是なり、三国並に一閻浮提の人・懺悔滅罪の戒法のみならず大覺天王・帝釈等も来下して蹋給うべき戒壇なり」

と、滅後の弟子に遺命されたのである。

【末法の本仏】

末法の本仏は日蓮大聖人であらせられる。釈尊は在世脱益の教主であり、末法下種本因妙の教主は日蓮大聖人である。釈迦仏法と日蓮大聖人の仏法との比較・勝劣は、種脱相對、第三法門、事理の一念三千等の項で明

らかに知ることが出来る。

本項には、主として、釈尊は末法の衆生には無縁の仏であること、末法に主・師・親三徳を具備した大慈大悲の仏は日蓮大聖人であられること、および御書に「教主釈尊」と仰せられているその釈尊とは、日蓮大聖人ご自身を指示しておられることなどについて述べる。

観心本尊抄（二四九頁） 在世の本門と末法の始は一同に純円なり但し彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の五字なり。

経王殿御返事（一一二四頁） 日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華経なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華経に・すぎたるはなし。

御義口伝下（七五二頁） 如来とは釈尊・惣じては十方三世の諸仏なり別しては本地無作の三身なり、今日蓮等の類いの意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那なり、されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり、寿量品の事の三大事とは是なり。

御義口伝下（七五三頁） 然りと雖も而も当品は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す云云。

諸法実相抄（一三五八頁） されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華経こそ本仏にては御座候へ、経に云く「如来秘密神通之力」是なり、如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身にして迹仏ぞかし、凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり。

御義口伝下（七八三頁） 守護章には有為の報仏は夢中の権果・無作の三身は覚前の実仏と云云、今日蓮等

の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は無作の三身覺前の実仏なり云云。

御義口伝下（七八四頁） 今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は無作三身の本主なり云云。

以上のごとく、釈尊と日蓮大聖人とはぜんぜん違うのである。しかして、日蓮大聖人はご一生を通じ、主・師・親三徳の御本仏として三大秘法を弘通された。これについての若干の御書をあげれば、

開目抄上（二三七頁） 日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり。主 師 親

佐渡御書（九五七頁） 日蓮は此関東の御一門の棟梁なり・日月なり・龜鏡なり・眼目なり・日蓮捨て去る時・七難必ず起るべし。

開目抄上（二〇二頁） されば日蓮が法華經の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事は・をそれをも・いだきぬべし。

報恩抄（三二九頁） 日蓮が慈悲曠大じひ こうだいならば南無妙法蓮華經は万年の外・未来までもながるべし、日本国の一切衆生の盲目もうもくをひらける功德あり、無間地獄の道をふさぎぬ。

百六箇抄（八六三頁） 自受用身じじゅうしんは本・上行日蓮は迹なり、我等が内証ないししょうの寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり。

百六箇抄（八六三頁） 久遠元始の天上天下・唯我独尊ゆいがどくそんは日蓮是なり、久遠は本・今日は迹なり、三世常住の日蓮は名字の利生りしょうなり。

御義口伝下（七六六頁） 末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり、法とは題目なり僧とは我等行者なり、仏とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり。

撰時抄（二八四頁） 日蓮は日本第一の法華經の行者なる事あえて疑ひなし。

下山御消息（三六三頁） 教主釈尊より大事なる行者……日蓮。

その他この種の例文は各御書に繁多であるが、略すこととして、次に教主釈尊に種々の義があり「南無妙法蓮華經を弘通する仏」という意味の場合は、すなわち日蓮大聖人であることを示す。

百六箇抄（八六四頁） 本因妙を本とし今日寿量の脱益を迹とするなり、久遠の釈尊の修行と今日蓮の修行とは芥子計も違わざる勝劣なり。

本因妙抄（八七七頁） 釈尊・久遠名字即の位の御身の修行を末法今時・日蓮が名字即の身に移せり。

船守弥三郎許御書（一四四六頁） 過去久遠五百塵点のそのかみ唯我一人の教主釈尊とは我等衆生の事なり。

新池殿御消息（一四三七頁） 主師親の釈尊をもちひぬだに不思議なるに、かへりて或はのり或はうち或は処を追ひ或は讒言して流罪し死罪に行はる。

釈迦仏像を本尊としない理由

次に釈迦仏像を本尊としない理由は、日寛上人の末法相応抄下（富要三卷一五六頁）にことごとく明かされている。いまはその概要を記す。詳しくは末法相応抄を熟読するのが至当である。

一、道理

第一に釈尊は熟脱の教主であり、末法は下種の時である。すなわち色相莊嚴の仏は在世熟脱の教主で末法下種の本仏ではない。

第二に三徳の縁が浅いゆえに用いない。正像の衆生は本已有善なるがゆえに、色相の仏に縁が厚く、末法の

衆生は本未有善なるがゆえに色相の仏には縁が薄い。

第三に色相の仏は人法勝劣があるゆえに用いない。すなわち本尊とは勝れたるを用うべきであり、色相の仏は劣り、法が勝れるゆえに、法を本尊となすべきである。

二、文証

法華經法師品第十には「經卷所住の処に塔を立つべし、舍利を安くべからず」とある。文句の八には「此の經は法身の舍利であるから、生身の舍利を安くべからず」とある。また法華三昧には「法華經一部を安置し、形像舍利を安んずるべからず」とある。

日蓮大聖人は本尊問答抄（三六五頁）に「法華經の題目を以て本尊とすべし、釈尊を本尊とすべからず」と仰せられ、日興上人は門徒存知の事に「五人は一同に釈迦を本尊とすべしと云う、日興云く妙法蓮華經の五字を本尊と為すべし」と。

以上はいずれも取意であり、そのほか類文は無数なれば、これを略す。

三、遮難

御書に釈迦像の造立を賛嘆され、あるいは日蓮大聖人が釈尊の一体仏をご所持になったことを理由として難ずる者がある。しかるに日蓮大聖人のご正意は、まったく釈尊の仏像ではないが、しかも、これを許された理由は次のごとくである。

第一に佐渡以前等の御書は一宗弘通の初めであり、ご正意ではなくても用捨よろしきにしたがわれた。

第二に当時は日本国じゅう一同に阿弥陀を本尊としていた。ゆえに門下が阿弥陀を捨てて釈尊を立てたのを

贊嘆された。

第三に日蓮大聖人の觀見の前には、釈尊の一体仏も、まったく一念三千自受用身の本仏と映ぜられた。また報恩抄、三大秘法抄等に「教主釈尊を本尊と為すべし」等の御文がある。これらの教主釈尊とは「南無妙法蓮華經をご所持になる仏」の意であり、五重三段では、第五の文底下種三段において立つ仏である。なおその理由は別項に論ずるとおりである。

【人法一箇】

釈迦仏法における色相莊嚴しきそうそうごんの仏は法勝人劣ほうしょうにんれつであり、久遠元初の自受用身くおんがんじよ じじゅうしんは人法体一である。すなわち色相莊嚴の仏は、化他のためにわが身を飾りかざ、世間の人情に随順ずいじゆんして——他人に氣兼ねをしながら法を説くので、そのような迹仏ほんねじようじゅうは本有常住の妙法に劣るのである。

これに対し久遠元初の自受用身ほんねじようじゅう（本仏）は久遠本有常住の仏であり、妙法蓮華經の五字を、本来から所持されてゐる。

すなわち自受用身というも即一念三千の妙法、妙法というも即自受用身で、人法一体である。

御書にはこの点について、次のごとくお示しになっている。

日女御前御返事（一二四四） 伝教大師云く「一念三千即自受用身・自受用身とは出尊形しゅつそんぎようの仏」

御義口伝下（七五九） 自受用身ほしいまにうけもちるみとは一念三千なり、伝教云く「一念三千即自受用身・自受用身とは

尊形そんぎようを出でたる仏と・出尊形仏とは無作の三身と云う事なり」云云。

御義口伝下（七六〇頁）本尊とは法華經の行者の一身の当体なり云云。

また法華經においても、法師品第十にいわく「若しは經卷所住の処には、乃至此の中には、已すでに如来の全身有いす」、宝塔品第十一にいわく「若し能く持つこと有らば則ち仏身を持つなり」、觀普賢經くわんふけんきやうにいわく「此の經を持つ者は即仏身を持つ」等々とあるは、すべて人法体一の証文である。

これに反して仏は法より出生するとか、仏を供養する功德は法を供養するに劣る等々の經文は、色相莊嚴の迹仏に約するゆえ、人法勝劣しやうれつを生ずるのである。五百塵点劫成道・本果第一番の寿量品の釈尊ですら、文底下種仏法に対すれば応おう仏昇進しやうしんの自受用身であり、法が勝すぐれ人が劣るのである。

われわれの人生においても、人法一箇の原理を生活に具現することが幸福の要因である。たとえば社会的評價へい（法）と自分自身の智慧力量ちゑりきやう（人）が相応しなかったら、生活は不幸にならざるをえない。人法一箇の大御本尊を信じて、あらゆる環境かんきやうを変えていく偉大なる力を身につけていくべきである。

【当体蓮華とうたいれんげ】

天台大師は法華玄義に、蓮華には当体蓮華と譬喻蓮華ひゆの二義があることを説いている。当体蓮華とは妙法蓮華であり、妙法の当体すなわち南無妙法蓮華經の当体をいう。譬喻蓮華とは、華草けそうの蓮華であり、これをもつて当体蓮華を説明しているのである。

当体義抄（五一三頁） 至理は名無し聖人理を觀じて万物に名を付くる時・因果俱時・不思議の一法之れ有り之を名けて妙法蓮華と為す此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足して闕減無し之を修行する者は仏因・仏果・同時に之を得るなり。

当体義抄（五一三頁） 又劫初に華草有り聖人理を見て号して蓮華と名く此の華草・因果俱時なること妙法蓮華に似たり故に此の華草同じく蓮華と名くるなり水中に生ずる赤蓮華・白蓮華等の蓮華是なり、譬喩の蓮華とは此の華草の蓮華なり此の華草を以て難解の妙法蓮華を顯す。

すなわち当体蓮華が先にあり、次に因果俱時の姿が当体蓮華に似ている華草にも蓮華と名づけたといふのである。しからば、当体蓮華とは、具体的に何をさすかといえは、

当体義抄（五一〇頁） 問う妙法蓮華經とは其の体何物ぞや、答う十界の依正即ち妙法蓮華の当体なり、問う若爾れば我等が如き一切衆生も妙法の全体なりと云わる可きか、答う勿論なり。

当体義抄（五一二頁） 問う一切衆生悉く妙法蓮華經の当体ならば我等が如き愚癡闇鈍の凡夫も即ち妙法の当体なりや、答う当世の諸人之れ多しと雖も二人を出でず謂ゆる權教の人・實教の人なり而も權教方便の念仏等を信ずる人は妙法蓮華の当体と云わる可からず實教の法華經を信ずる人は即ち当体の蓮華・真如の妙体是なり。

当体義抄（五一二頁） 所詮妙法蓮華の当体とは法華經を信ずる日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是なり、正直に方便を捨て但法華經を信じ南無妙法蓮華經と唱うる人は煩惱・業・苦の三道・法身・般若・解脱の三徳と轉じて三觀・三諦・即一心に顯われ其の人の所住の処は常寂光土なり、能居所居・身土・色心・俱体

俱用・無作三身の本門寿量の当体蓮華の仏とは日蓮が弟子檀那等の中の事なり是れ即ち法華の当体・自在神力の顯わす所の功能なり敢て之を疑う可からず之を疑う可からず。

当体義抄（五一八頁）問う末法今時誰れ人か当体蓮華を証得せるや、答う……日蓮が一門は正直に權教の邪法・邪師の邪義を捨てて正直に正法・正師の正義を信ずる故に当体蓮華を証得して常寂光の当体の妙理を顯す事は本門寿量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華經と唱うるが故なり。

御義口伝下（七五四頁）無作の三身の当体の蓮華の仏とは日蓮が弟子檀那等なり南無妙法蓮華經の宝号を持ち奉る故なり云云。

すなわち一往は十界の依正、われわれ一切衆生も含めて宇宙の万物が当体蓮華といえる。しかし再往は、權教方便の教え、邪宗教を信ずる者は当体蓮華とはいえず、ただ末法の御本仏日蓮大聖人の三大秘法の御本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱える者のみが、眞の当体蓮華といえるのである。しかして、その人は、即身成仏の大功德を、わが身に、わが生活に体得できるのである。

次に、御義口伝と日寛上人の文段を拝してみよう。

御義口伝上（七〇八頁）蓮華とは因果の二法なり是又因果一体なり……法界は妙法なり法界は蓮華なり法界は經なり蓮華とは八葉九尊の仏体なり。

当体義抄文段（富要四卷三九四頁）一には十界三千の妙法の当体を直に蓮華と名づくるがゆえに当体蓮華というなり、この義入文の相分明なり、二には一切衆生の胸間の八葉を蓮華と名づく、是れを当体蓮華と云う。

終わりに、天台大師は、譬喩蓮華を用いて、すなわち迹門の三譬、本門の三譬等によって、当体蓮華を説明し、さらに十如是が、本門の十妙等についても譬喩蓮華をもって説き、また迹門の開三顯一の蓮華、本門の開近顯遠の蓮華等も説いているが、所詮は迹中化他の所説であり、本地難思の境智冥合の本有無作の当体蓮華は顯わしてはいないのである。

【色心不二】

色心不二の仏法哲学は、現代世界の二大思想たる唯物論、唯心論（觀念論）を打ち破り指導していく大生命哲学である。色とは肉体・物質をいい、心とは精神・心をいう。古来、二元論では肉体と精神はまったく独立する二つの実体であると考え、唯物論者は精神よりも肉体のほうがより根本の実体であると説き、唯心論者（觀念論者）は精神こそ真の実体であると唱えた。しかし、これらはすべて誤りである。なぜなら人が行動を起こすとき、精神と体の働きは一体のものであり、決して独立した二つの実体ではない。しかして東洋仏法の真髓たる日蓮大聖人の哲学において、色と心すなわち肉体と精神は一体不二のものであるという根本原理を説き明かしたのである。

十如是事（四一〇頁） 如是相とは我が身の色形に顯れたる相を云うなり是を応身如来とも又は解脱とも又は仮諦とも云うなり、次に如是性とは我が心性を云うなり是を報身如来とも又は般若とも又は空諦とも云うなり。

御義口伝上（七〇八頁） 歸命きみもちとは南無妙法蓮華經是なり、釈に云く隨緣不變・一念寂照ねんじやくしやうと、又歸とは我等が色法なり命とは我等が心法なり色心不二なるを一極ごくと云うなり、釈に云く一極に歸せしむ故に仏乗と云うと。

諸宗問答抄（三八〇頁） 凡そ心と色法とは不二の法にて有る間かきたる物を以て其の人の貧福ひんぷくをも相するなり、然れば文字は是れ一切衆生の色心不二の質なり。

觀心本尊抄（二三九頁） 草木の上に色心の因果を置かずんば木画の像を本尊に恃たのみ奉ること無益なり。

真言見聞（一四六頁） 十界互具は思いもよらず・まして非情の上の色心の因果争いかでが説く可きや。

すなわち「色心不二なるを一極と云うなり」の一極とは、生命と約して拝すべきである。唯物論、唯心論等の生命觀のうゑに築かれた哲学は、人々を救えなかつたばかりでなく、むしろ不幸にしてきたのである。しかし色心不二の生命哲学を根本とする仏法哲学のみが、人々を真に救い幸福にできるのである。三大秘法の大御本尊こそ、色心不二の大哲学によって打ち立てられた人類救済の大仏法であることを知らなければならぬ。

【下種本因妙】

種熟脱しゆじゆくだつの法門は仏法の肝要かんようである。末法においては、釈迦仏法は脱益だつちやくの仏法であつて利益がなく、日蓮大聖人の下種益の仏法のみが衆生を利益するのである。

秋元御書（一〇七二頁） 種熟脱の法門・法華經の肝心なり、三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種と

して仏になり給へり。

観心本尊抄（二四九頁） 在世の本門と末法の始は一同に純円じゆんえんなり但し彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の五字なり。

曾谷入道等許御書（一〇二七頁） 而るに今時の学者時機に迷惑して或は小乗を弘通し或は権大乘を授与し或は一乗を演説すれども題目の五字を以て下種と為す可きの由来を知らざるか。

御義口伝下（七五三頁） 当品（寿量品）は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す。

次に、本因妙とは天台大師が法華玄義に説いた法華經本門の十妙の一つであり、本仏の妙因の修行をいうのである。しかして、本因妙について、釈迦仏法の本因妙すなわち脱益家の本因妙と、日蓮大聖人の仏法の本因妙すなわち下種本因妙との二種がある。

先師の古義（日蓮正宗教学叢書・祖文纂要・日露上人集）にいわく、

凡そ本因妙に付て二種あり謂く台家文上と当家文底となり台家の本因妙とは我本行菩薩道の文に依って境智行位の四妙を具足する初住に無明を断じ中道を証するの時を以て本因妙と名づくるなり是れ台家文上の本因妙の相なり三益に約すれば脱益の位なり豈に其の已前なからんや、謂く入住已前久遠遠の当初無教の時に於て内薰自悟する一迷先達の時を当家の文底下種の本因妙と名づく則ち今の総勘文抄（五六八頁）の文意是れなり、文に凡夫の時とは名字即にして位妙なり我が身地水火風空とは境妙なり之を知るとは智妙なり即座開悟と云う豈に修行なからんや是れ行妙なり、此の四妙具足する是れを種家の本因妙の相と云ふ是れ則ち我

が蓮宗の極致なり此の他本因妙抄血脈抄等の文義之れを略す。

さらに下種仏法と脱益だつちやくの仏法とを相對すれば、下種仏法は本因妙の仏法であり、日蓮大聖人は下種本因妙の教主である。また脱益の仏法は本果妙の仏法であり、釈尊は脱益本果妙の教主である。

御講聞書（八〇八頁） 本因の因と云うは下種の題目なり、本果の果とは成仏なり、因と云うは信心領納りようのうの事なり、此の經を持ち奉たてまつる時を本因とす其の本因のまま成仏なりと云うを本果とは云うなり、日蓮が弟子檀那の肝要かんようは本果より本因を宗とするなり、本因なくしては本果有る可からず、仍て本因とは慧えの因にして名字即の位なり、本果は果にして究竟即くきようそくの位なり。

百六箇抄（八五四頁） 本因妙の教主・本門の大師・日蓮。

百六箇抄（八六三頁） 下種の法華經教主の本迹。自受用身は本・上行日蓮は迹なり、我等が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某それがしなり。

【即身成仏そくしんじようぶつ】

即身成仏とは、当位即妙とういそくみょうや凡夫即極等ぼんぶそくごくとうと同じ意味であり、われわれ凡夫が凡夫そのままの姿で成仏することをいっている。仏さまはどこにいるかとなれば、われわれ衆生が御本尊を受持して題目を唱える当体であり、それ以外の仏の当体はない。

御講聞書（八三七頁） 此の莊嚴とは別してかざり立てたるには非ず当位即妙の莊嚴なり、煩惱即菩提ぼんのうそくぼだい・生しょう

死じ即すなは涅槃ねはん是なり。

当あた体たい義ぎ抄しょう（五一二ご） 正直に方便を捨て但ただ法華經を信じ南無妙法蓮華經と唱となうる人は……無む作さ三さん身じんの本門
寿量じゆうりやうの当とう体たい蓮華れんげの仏とは日蓮が弟子檀那等の中なかの事なり。

諸法実相抄（一三五ひ） 凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり。

日女御前御返事（一二四に） 此の御本尊ごほんそん全まく余所よそに求る事なかれ・只我れ等衆生の法華經を持ちて南無妙法蓮華經と唱となうる胸中の肉団にくだんにおはしますなり。

そのほか、この種の類文るいもんは多数ある。凡夫は当体の本仏であるが、迷いの道に陥おちつて自分の生命が仏であることを知らない。それゆえ御本尊を信じて修行すれば、信をもって慧に代えて自分自身が永遠に実在する仏であることを覚知する。これを即身成仏というのである。しかし、改転の成仏等は釈迦仏法で女人が男子に身を変えてから成仏する等と説くので、真の即身成仏ではない。

【主し師ゆ親しんの三さん徳とく】

一切衆生を救済きうさいすべき本仏・本尊は、必ず主・師・親の三徳を具備している。すなわち、眷属けんぞくを守る力のある主徳と、眷属を指導しうる師徳と、眷属を慈愛する親徳があるべきである。世間には、それぞれ主徳、師徳、親徳の一分をそなえた人があるが、三徳具備は仏に限るのである。

法華經譬喻品第三 今此の三界は皆是れ我が有なり（主）、其の中の衆生は悉ことごとく是れ吾が子なり（親）、而しか

も今此の処は諸の患難多し、唯我れ一人のみ能く救護を為す（師）。

南条兵衛七郎殿御書（一四九四） 釈迦如来は我等衆生には親なり師なり主なり……ひとり三徳をかねて恩ふかき仏は釈迦一仏に・かぎりたてまつる。

祈禱抄（一三五〇） 仏は人天の主・一切衆生の父母なり・而も開導の師なり、父母なれども賤き父母は主君の義をかねず、主君なれども父母ならざればおそろしき辺もあり、父母・主君なれども師匠なる事はなし・諸仏は又世尊にてましますば主君にては・ましますも・娑婆世界に出でさせ給はざれば師匠にあらず・又「其中衆生悉是吾子」とも名乗らせ給はず・釈迦仏独・主師親の三義をかね給へり。

また仏といっても、小乗の仏よりも大乘の仏、権大乘の仏よりも実大乘の仏、法華迹門の仏よりも法華本門の仏、本門の仏よりも文底下種の本仏と次第があり、末法今時においては、ただ文底下種の本仏、日蓮大聖人のみが衆生を救済する三徳具備の仏である。

色相莊嚴なる本門の釈尊といえども、本末有善の末法の衆生には三徳の縁がなく、また力がないことを知るべきである。

開目抄上（一八六） 夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり所謂主師親これなり。

開目抄下（二三七） 日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり。

開目抄下（二三二） 我日本の柱（主）とならむ我日本の眼目（師）とならむ我日本の大船（親）とならむ等とちかいし願やぶるべからず。

報恩抄（三二九） 日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華經は万年の外・未来までもながるべし（親）、日本

國の一切衆生の盲目をひらける功德あり（師）、無間地獄の道をふさぎぬ（主）。

新池殿御消息（一四三七頁） 主師親の釈尊（文底の釈尊即日蓮大聖人）をもちひぬだに不思議なるに、かへりて或は醫のり或は打うち或は処を追ひ或は謔言して流罪し死罪に行はる。

御義口伝下（七五七頁） 第十六我亦がやくい為せ世父せふの事。御義口伝に云く我とは釈尊一切衆生の父なり主師親に於て仏に約し經に約す、仏に約すとは迹門の仏の三徳は今此三界の文是なり、本門の仏の主・師・親の三徳は主の徳は我が此土安穩あんゐんの文なり師の徳は常説法教化じようせつぽうきやうけの文なり親の徳は此の我亦がやくい為せ世父せふの文是なり、妙樂大師は寿命品の文を知らざる者は不知恩の畜生と釈し給えり・經に約すれば、諸經中王は主の徳なり能救のうぐ一切衆生は師の徳なり又如また大梵天王一切衆生之父の文は父の徳なり、今日蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經と唱え奉たてまつる者は一切衆生の父なり無間地獄むげんじごくの苦を救う故なり云云、涅槃經ねはんぎやうに云く「一切衆生の異いの苦を受くるは悉ことごとく是れ如来一人の苦」と云云、日蓮が云く一切衆生の異の苦を受くるは悉く是れ日蓮一人の苦なるべし。

一谷入道御書（一三三〇頁） 日蓮は日本國の人人の父母ぞかし・主君ぞかし・明師ぞかし・是を背そむん事よ、念仏を申さん人人は無間地獄むげんじごくに墮おちん事決定なるべし。

曾谷入道等許御書（一〇二七頁） 正像二千余年には猶下種なの者有り例せば在世四十余年の如し……今は既に末法に入つて在世の結縁の者は漸漸ぜんぜんに衰微すいひして權実の二機皆ことごとく尽きぬ。

諸法実相抄（一三五八頁） 凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり、然れば釈迦仏は我れ等衆生のためには主師親の三徳を備へ給うと思ひしに、さにては候はず返つて仏に三徳をかふらせ奉るは凡夫（名字凡夫の本仏日蓮大聖人）なり。

【久遠名字即】

久遠とは本有常住ほんぬじようじゆうの生命觀であり、名字即とは六即位のなかで、初めて仏法の信仰にはいった位である。日蓮大聖人の仏法においては、久遠名字即の凡夫こそ本仏であり、また名字即の位において真に即身成仏できる衆生である。

御義口伝下（七五九頁） 御義口伝に云く此の品の所詮しよせんは久遠実成くおんじつじようなり久遠とははたらかさず・つくろわず。もとの儘ままと云う義なり、無作の三身なれば初めて成ぜず是れ働かざるなり、卅二相八十種好を具足せず是れ繕つくろわざるなり本有常住ほんぬじようじゆうの仏なれば本の儘ままなり是を久遠と云うなり、久遠とは南無妙法蓮華經なり実成無作と開けたるなり云云。

三世諸仏總勘文教相廢立（五六六頁） 十法界の依報えほう・正報しやうほうは法身の仏ほつしん・一体三身の徳とくなりと知って一切の法は皆是れ仏法なりと通達つうだつし解了げりようする是を名字即みょうじそくと為す名字即の位より即身成仏えんじんす故に円頓えんどんの教きやうには次位の次第無し。

さて久遠名字本因妙の仏法は日蓮大聖人の仏法であり、釈尊は三十二相八十種好しゆこうをもつて身を莊嚴する本果ほんが脱益だつちやくの仏である。すなわち下種本因妙の仏は名字凡夫の姿で世に出現するのである。

三世諸仏總勘文教相廢立（五六八頁） 釈迦如来・五百塵点劫じんてんごうの当初そのかみ・凡夫にて御坐おわせし時我が身は地水火風空なりと知しるしめして即座に悟を開き給いき、後に化他けたの為ために世世せせ・番番ばんばんに出世じやうし・成道じやうどうし在在ざいざい・処処しよしよに八相はつさう

作さ仏ぶつし云云。

右の御文において凡夫位で開悟かいごした釈迦如来とは、末法に凡夫位で出現する日蓮大聖人と一体である。ついで化他のために身を莊嚴して出世成道する釈尊が、すなわち本果妙の釈尊である。本果第一番成道の釈尊ですら、垂迹すいじやく化他くたの仏であつて、常住の本仏ではない。この点において日蓮正宗と他の諸宗とは、その教義がまったく相容あひいれないのである。

当体義抄（五一三頁） 至理しりは名無し聖人理を觀じて万物に名を付くる時・因果いんが俱時ぐじ・不思議ふしぎの一法之れ有り之を名けて妙法蓮華と為す此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足して闕減けつげん無し之を修行する者は仏ぶつ・因いん・仏果ぶつが・同時に之を得るなり、聖人此の法を師と為して修行覺道かくどうし給えば妙因・妙果・俱時に感得かんとくし給うが故に妙覺果滿みょうかくくまんの如来と成り給いしなり。

右の御文について日寛上人は次のごとく釈せられている。すなわち因果俱時の下は名玄義、此の妙法蓮華の一法の下は体玄義、之を修行する者はの下は宗玄義、聖人此の法を師と為しての下は用玄義なりと。ここに本因妙下種家の仏法を五重玄に配立してきわめて明らかとなるのである。

すなわち聖人とは名字即の釈尊なるがゆえに位妙にあたる。この名字凡夫の釈尊が一念三千の妙法蓮華經を本尊として修行したので、すなわち境妙である。修行とは信心・唱題であり、信心は智妙にあたり、唱題は行妙である。この境智行位を合して本因妙となし、この本因妙の修行によって即座かいごに開悟し本果にいたるのである。これこそ日蓮大聖人の仏法おうちいの奥底であり極説である。

当体義抄（五一三頁） 釈尊五百塵点劫じんてんごうの当初そのかみ此の妙法の当体蓮華を証得して世世番番じようどうに成道を唱のうえ能証所

証の本理を顕し給えり。

右の御文においても日蓮宗各派は天台に准じて五百塵点の当初を本果第一番の釈尊であると立てている。しかし、当流の意は久遠元初名字凡夫位の御時をさして、五百塵点の当初という。

百六箇抄（八六四頁） 久遠の釈尊の修行と今日蓮の修行とは芥子計も違わざる勝劣なり云云。

本因妙抄（八七七頁） 釈尊・久遠名字即の位の御身の修行を末法今時・日蓮が名字即の身に移せり。

【境智冥合】

境は客觀世界であり、智は主觀的智慧である。たとえば一家の生活を安定しようとして努力し、実際に安定したとする。一家の生活は境であり、努力する自分が智で、安定した生活は境智冥合である。こうしてみると、われわれの生活には境智の冥合しない場合が実に多い。たとえ一家を安定し、事業が繁盛したとしても、自分自身の悩みはもちろん、他人や社会の苦しみを徹底的に救済できるわけではない。

しかるに仏の智慧は甚深無量であり、境智冥合の当体なのである。すなわち宇宙全体を境として、そのすべてを解決できる智をもっておられるのが仏である。また人と法の一致、人法一箇でもある。ゆえに、

曾谷殿御返事（一〇五五頁） 夫れ法華經第一方便品に云く「諸仏の智慧は甚深無量なり」云云、釈に云く

「境淵無辺なる故に甚深と云い智水測り難き故に無量と云う」と、抑此の經釈の心は仏になる道は豈境智の二法にあらずや、されば境と云うは万法の体を云い智と云うは自体顕照の姿を云うなり、而るに境の淵

ほとりなく・ふかき時は智慧の水ながるる事つつがなし、此の境智合しぬれば即身成仏するなり。

われわれ衆生の場合にあつては、境智の合することはむずかしい。されば、われわれは日蓮大聖人ご建立の大御本尊を信じ修行するときに、御本尊を境とし、わが生命を智として、ここに真実の境智冥合がある。

御義口伝上（七一六頁） 衆生に此の機有つて仏を感じ故に名けて因と為す、仏機を承けて而も応ず故に名けて縁と為す。

これすなわち凡夫の修行に仏身の応ずる境智冥合の御本尊の功德をお示しの御書である。

天台大師の文句第九下に「境智和合する則は因果有り、境を照すること未だ窮らざるを因と名け、源を尽すを果と為す」と説いて、客観世界を未だ達観できない九界を因とし、宇宙の実相を達観した境智和合の終わりを仏界の果となしたのも、このことを指示している。さらに多宝如来を境とし釈迦仏を智に配するときもある。

四条金吾殿御返事（一一一七頁） 諸法をば多宝に約し実相をば釈迦に約す、是れ又境智の二法なり多宝は境なり釈迦は智なり、境智而二にして・しかも境智不二の内証なり、此等はゆゆしき大事の法門なり煩惱即菩提・生死即涅槃と云うもこれなり。

【末法の観心】

観心とは自己の生命の実体を見つめて、幸福を証得することである。ゆえに末法においては御本尊を信じて修行する以外にない。

人間の生命はこの世だけの偶然であるかどうか、現実の生活は物質的にも精神的にも苦しむのはなぜか、どうすれば個人も社会も真に幸福になれるのか、このようなことを解決するのが教えであり、修行である。あらゆる宗教にはそれぞれ特有の教えがあり修行がある。仏教でもそれぞれの經典によって修行の方法もその結果として得られる悟りも異なる。観心についても、正法一千年の観心と像法一千年の観心と異なり、また末法には像法時代の天台宗のごとく一念三千の観念観法をこらしても、まったく無益有害である。しからば末法の観心はいかにというに、日蓮大聖人は観心本尊抄に詳しくこれをご教示になっている。以下順を追ってその概要を拝する。

すなわち観心本尊抄（二四〇頁）にいわく「出處既に之を聞く観心の心如何、答えて曰く観心とは我が己心を觀じて十法界を見る是を觀心と云うなり」とて明鏡に向かつて自具の十界・百界千如・一念三千を觀るべきことをお示しになっている。ここに明鏡とは大御本尊であることはいうまでもない。

これについて己心の十界は信じられないとの問いに、六道を明かし四聖を明かすが、さらに「問うて曰く教主釈尊は（此れより堅固に之を秘す）」（二四二頁）以降には、凡夫の一念に仏界を具しているというのは絶対に信ずることができないとの反問を掲げ、法華經も天台も誤りなりと断定した。それに対する答えとして「但し初の大難を遮せば……」（二四五頁）より本尊の妙用・大功德を明かして、この御本尊を受持することが即觀心であると結論あそばされている。その文は、

觀心本尊抄（二四六頁） 釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を譲り与え給う。

すなわち妙法五字の御本尊を受持することが即觀心である。釈尊の過去無量劫にわたって積んできた因位の修行および果位の万徳は、ことごとく妙法五字の御本尊に具足している。

われらがこの御本尊を受持したてまつれば、自然に仏と等しくなる。すなわち凡夫即諸法実相の仏と開顯するのである。

【教相・觀心】

教相と觀心は相對する語である。教相とは、仏所説の教法のありさまを表面的に解釈するのをいう。觀心とは「己心を觀じて十法界を見る」といわれるように、教相の主要点の意を三大秘法の立ち場から觀するのをいうのである。すなわち法華經においても釈迦仏法の立ち場は表面的解釈にすぎないから教相であり、日蓮大聖人の仏法の立ち場は悟りの面から觀するゆえに觀心となる。

百六箇抄（八五六頁） 在世觀心法華經の本迹。一品二半は在世一段の觀心なり天台の本門なり、日蓮が為には教相の迹門なり云云。

本因妙抄（八七五頁） 彼の觀心は此の教相。

本因妙抄（八七二頁） 四に会教顯觀・教相の法華を捨てて觀心の法華を信ぜよと。

本因妙抄（八七四頁） 仏は熱脱の教主・某は下種の法主なり、彼の一品二半は舍利弗等の為には觀心たり、我等・凡夫の為には教相たり。

觀心本尊抄送狀（二五五頁） 觀心の法門少少之を注して大田殿・教信御房等に奉る。

十法界事（四二〇頁） 法華本門の觀心かんじんの意を以て一代聖教を按あんずるに菴羅果あんらかを取って掌中に捧ささぐるが如し、所以ゆえんは何ん迹門いんの大教起れば爾前にぜんの大教亡じ・本門の大教起れば迹門しやくもん爾前亡じ・觀心の大教起れば本迹爾前共に亡ず。

百六箇抄（八六六頁） 下種三種教相の本迹。二種は迹門・一種は本門なり、本門の教相は教相の主君なり、二種は二十八品・一種は題目なり、題目は觀心の上の教相なり。

百六箇抄（八五五頁） 本果の妙法蓮華經の本迹。今日の本果は從因至果じゅういんしかなれば本の本果には劣るなり、壽量の脱益・在世一段の一品二半は舍利弗等しやうりほつの声聞の為の觀心なり、我等が為には教相なり。

【受持即觀心じゆじ そくかんじん】

受持とは、法華經法師品第十に説かれた五種妙行（受持・誦・誦・解説・書写）の一つであるが、正像末における意義はそれぞれ異なり、特に末法今時においては受持の一行のみが、最も大切である。すなわち三大秘法の御本尊を受持する一行によって、成仏を決定するのである。

法華經法師品第十 妙法華經の、乃至一偈を受持、誦誦し、解説、書写し、此の經卷に於いて、敬いみ視るこ
と仏の如くにせん。

法華文句 此の品（法師品）に五種法師あり、一に受持、二に誦、三に誦、四に解説、五に書写なり。

大論 信力の故に受け念力の故に持つ。

御義口伝下（七八三頁） 此の妙法等の五字を末法・白法びやくほう・隱没いんもつの時上行菩薩・御出世有つて五種の修行の中には四種を略して但受持の一行にして成仏す可しと經文にまのあた親り之れ有り。

次に、受持の一行に、總体の受持と別体の受持の二つの義がある。總体の受持とは、受持・読・誦・解説・書写の五種の妙行を受持の一行に含めて受持と名づけるのである。法華經の文の所々に「能く斯この經を持つ云」また神力品の偈のなかに「斯この經を受持すべし」等とあるのがこれである。二に別体の受持とは五種の妙行のなかの第一、第二、第三等あるうちの第一の受持である。神力品の長行のなかに「す应当に一心に受持、読、誦、解説、書写し、説の如く修行すべし」等と説くのがこれである。

「受持の一行にして成仏す可し」という日蓮大聖人の仰せ、および觀心本尊抄の意は、總体の受持であり五種の妙行を通じて受持としている。

すなわち、信心は受持が家の受持であり、口唱は受持が家のどくじゆ読誦であり、折伏・指導等は受持が家の解説であり、御法主上人の御本尊書写は受持が家の書写となるのである。

觀心とは、我が己心を觀じて十法界を見ることをいい、これに天台流の觀心と末法の觀心がある。天台流に読むときは、己心の十法界を觀見することである。しかして末法の觀心とは、文底より読めば、己心を觀ずるというのは御本尊を信ずることであり、十法界を見るといふのは妙法を唱えることである。すなわち末法の觀心とは、御本尊に対する信心をいふのである。

觀心本尊抄（二四〇頁） 觀心とは我が己心をかん觀じて十法界を見る是を觀心と云うなり。

しかして、次の観心本尊抄の文は、受持即観心の義をあらわしている。

観心本尊抄（二四六頁） 釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う。

独一本門の大御本尊を受持することそれ自体が、末法の観心となる。そのまえに引く無量義經の「未だ六波羅蜜を修行する事を得ずと雖も六波羅蜜自然に在前す」という文は、因位の万行が妙法五字に具足するの義をあらわしているであり、これ受持即観心を説くのである。

「釈尊の因行果徳の二法」とは、権迹本の釈尊の因行果徳の二法である。「妙法五字に具足す」とは、開結本地難思の境智の妙法である。ゆえに一切諸仏の因位の万行・果位の万徳は皆ことごとくこの妙法五字に具足し、末法下種の大御本尊の功徳は無量無辺で広大深遠の力用をそなえているのである。

「我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」とは、正しく受持即観心の義である。「此の五字」とは大御本尊であり、御本尊を受持することそれ自体が功徳を成ずるのであるから受持即観心である。なぜ受持をもって即観心と名づけるかといえ、およそ当下種家の観心は、ただ信心口唱をもって観心とするのであって、受持とは総体の受持が家における受持すなわち正しく信心口唱であるから、受持即観心といふのである。

さらに観心本尊抄の受持即観心の心のなかには、四種の力用を明かしている。「我等受持」とは信力・行力であり、「此の五字」とは法力であり、「自然に譲り与える」とは仏力である。（詳しくは「観心本尊抄講義」を参照のこと）

【煩惱即菩提ぼんのうそくぼだい】

煩惱とは、梵語ぼんごでは吉隸舍きれいしやという。見惑けんわく（我見、辺見等の妄惑）、思惑しわく（貪瞋癡等の迷情）、塵沙惑じんじやわく、無明惑むみょうわくの三惑等が、心を煩わづらわし身を悩ますことをいい、いわゆる人生・生活における悩み苦しみ不幸である。菩提とは梵語であり、道、覺などと訳す。仏法の悟さとりの境地をいい、いわゆる人生・生活における喜び楽しみ幸福である。煩惱は無明の發達したもので、菩提は法性の發展したものであるともいえる。

釈迦仏法においては、煩惱を断じ尽くし三惑を断じて、初めて菩提の境地が得られると説く。しかし、日蓮大聖人の仏法においては、三大秘法の御本尊を信ずることによって、煩惱を断ぜずに煩惱はそのまま菩提となるところという煩惱即菩提を説くのである。實際生活において煩惱は断ぜられるものではないし、また信心によって煩惱がそのまま菩提になる日蓮大聖人の仏法は、まことにすばらしいといわざるをえない。民衆救済、広宣流布を願う大煩惱は、そのまま大菩提になることを思うならば、われわれは、すべからく信心強盛に大煩惱の火を燃やすべきである。

法華玄義 煩惱即菩提と達するを名づけて慧と為す。

生死一大事血脈抄（一三三八頁） 相構あいかまえ相構えて強盛の大信力を致して南無妙法蓮華經・臨終正念りんじゆうしやうねんと祈念し給へ、生死一大事の血脈此れより外に全く求むることなかれ、煩惱即菩提・生死即涅槃とは是なり。

四条金吾殿御返事（一一一七頁） 諸法をば多宝に約し実相をば釈迦に約す、是れ又境智の二法なり多宝は

境なり釈迦は智なり、境智而二にして・しかも境智不二の内証なり、此等はゆゆしき大事の法門なり煩惱即
菩提、生死即涅槃と云うもこれなり……普賢經に云く「煩惱を断ぜず五欲を離れず諸根を淨むることを得て
諸罪を滅除す」止觀に云く「無明塵勞は即是菩提生死は即涅槃なり」

【常樂我淨】

四徳のこと。一切の生命は常住の實在であり、現世は清らかな樂土であるとの意。信心生活に約せば、永遠
の生命を覺知し、絶對の幸福生活を営むことをいう。

常とは無常に対し永遠の意。生命は三世にわたり、永遠に連続して不滅であること。樂とは苦に対し、人生
は樂しむためにあり、娑婆世界は樂土であるということ。また生死煩惱の苦を明らかに見つめ、それを涅槃苦
提の樂とすること。我とは無我に対し、生命の本質をいい、仏が我が宇宙に遍満していることをいう。淨とは
空（不淨）に対し、清らかな意。染法を離れ淨法であつて身も国土も鏡のごとく清淨な存在をいう。

釈尊は當時のインドの社会が、現世主義、享樂主義であるのを見て、この世は苦であり、空であり、無常で
あり、無我であると説いた。そして、このような苦・空・無常・無我の世を捨て、出家して道を求めよと説い
たのが爾前經である。しかして出世の本懷たる法華經には常樂我淨と説いて、この世は、われも人も国土も、
本有常住の實在であり、清く楽しいものであると開顯したのである。それは壽量品第十六の「常住此說法」

「我此土安穩」「自我得仏来」、藥王品第二十三の「如清涼池」の文等である。

松野殿御返事（一三八七頁） 諸仏菩薩は常樂我淨の風にそよめき娛樂快樂し給うぞや。

日蓮大聖人は地涌の四菩薩の徳をこの四徳に配せられている。

御義口伝上（七五一頁） 上行は我を表し無辺行は常を表し淨行は淨を表し安立行は樂を表す、有る時には一人に此の四義を具す二死の表に出づるを上行と名け断常の際を躡ゆるを無辺行と称し五住の垢累を越ゆる故に淨行と名け道樹にして徳円かなり故に安立行と曰うなりと。

【総別の二義】

総別の二義とは、総判と別判との二義である。「総じて」とは、一往の表面的な立場であり、別してとは再往のさらに深く突っ込んで考えた場合の立ち場である。ゆえに総判は劣り別判は優れるのである。

総別は相対的なものであるから、別判のなかにも、さらに総別が論ぜられて、究極の別判は三大秘法の大御本尊に到達するのである。

総別の二義は、仏法の正邪を論じ、教義の浅深を述べるのに、まことに大事な教判である。なぜならば、たとえば釈尊一代の教法をみるのに、総じては五時八教はすべて真実であるが、別しては法華經こそ釈尊出世の本懐の教えであり、他の四味三教はいまだ真実を顯わさぬ爾前經である。さらに総じては法華經二十八品なかにんずく本門寿量品は究竟円実の教えであるが、別しては本門寿量品の肝心、三大秘法の南無妙法蓮華經のみが最高真実の教えである。総別の二義を立てなければ、中途半端な教えをもって事たれりということになるゆえ

に、大切な教判になるのである。

曾谷殿御返事（一〇五五頁） 釈尊より上行菩薩へ譲り与へ給う然るに日蓮又日本国にして此の法門を弘む、
又是には総別の二義あり総別の二義少しも相そむけば成仏思もよらず輪廻生死のもといたらん。

御義口伝下（七五二頁） 如来とは釈尊・惣じては十方三世の諸仏なり別しては本地無作の三身なり、今日
蓮等の類いの意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那なり、されば無作の三身とは末法
の法華經の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり。

【生死しょうじ一大事いちだいじ血脈けちみやく】

生死とは生老病死の略で、人生、生活のことである。一大事とは人生の最大事なことであり、御義口伝では
方便品の一大事因縁の文を妙法蓮華經に配し、一大事の文を空仮中の円融三諦すなわち南無妙法蓮華經に配し
ている。さらに我が身が妙法五字なりと悟さとって即身成仏するのが一大事であるとしている。さらに一大事とは
三大秘法である。血脈とは信心の血脈である。また仏法の相承は血脈相承であるべきである。

生死一大事血脈抄には、生死一大事血脈について、詳しい解釈があり、日蓮大聖人の弟子として異体同心に
大御本尊を信じ南無妙法蓮華經を唱えて成仏するのが、生死一大事血脈であると仰せである。

御義口伝上（七一六頁） 一とは妙なり大とは法なり事とは蓮なり因とは華なり縁とは経なり云云……此の
五尺の身妙法蓮華經の五字なり……此の大事を説かんが為に仏は出世したもう我等が一身の妙法五字なりと

開仏知見する時・即身成仏するなり。

御義口伝上（七一七頁）一とは中諦・大とは空諦・事とは仮諦なり此の円融の三諦は何物ぞ所謂南無妙法蓮華經是なり、此の五字日蓮出世の本懷なり之を名けて事と為す。

文底秘沈抄（富要三卷六九頁）仏は法華を以て本懷と為すなり乃至文底に三大秘法を秘沈する故なり、何を以て識ることを得んや、一大事の文是なり。一は謂く本門の本尊なり乃至大は謂く本門の戒壇なり乃至事は謂く本門の題目なり。

生死一大事血脈抄（一三三六頁）夫れ生死一大事血脈とは所謂妙法蓮華經是なり、其の故は釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて此の妙法蓮華經の五字過去遠劫より已來寸時も離れざる血脈なり。

生死一大事血脈抄（一三三七頁）久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華經と我等衆生との三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華經と唱え奉る處を生死一大事の血脈とは云うなり。

生死一大事血脈抄（一三三七頁）総じて日蓮が弟子檀那等自他彼此の心なく水魚の思を成して異体同心にして南無妙法蓮華經と唱え奉る處を生死一大事の血脈とは云うなり、然も今日蓮が弘通する處の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か。

生死一大事血脈抄（一三三八頁）相構え相構えて強盛の大信力を致して南無妙法蓮華經・臨終正念と祈念し給へ、生死一大事の血脈此れより外に全く求むることなかれ、煩惱即菩提・生死即涅槃とは是なり、信心の血脈なくんば法華經を持つとも無益なり。

身延相承書（一六〇〇頁）血脈の次第 日蓮日興。

【染淨の二法】せんじょう に ほう

われわれの生命は、即一念三千の妙法の当体であるが、染淨の二法によって、それぞれ幸・不幸を現出する。生命の染法とは、悪縁によって間違った宗教を信じたために、汚れた生命の状態である。生命の淨法とは、善縁正法によって淨らかな生命の状態になることである。

染とは迷妄めいもうの法であり、淨とは清淨な法である。染は九界で淨は仏界である。

すなわち染法とは、間違った宗教を信じて仏法に反対し、汚れた生命となり、不幸な生活に陥おちいることである。淨法とは、末法の大正法である日蓮大聖人の三大秘法を信じて、清淨なる生命、幸福な生活を営いとなむことである。たとえ、いままでいかに間違った宗教を信じて大不幸にあえいでいようと、淨法によって成仏の境涯をつかめるのである。

当体義抄（五一〇頁）ほつしやう みやうり 法性の妙理に染淨の二法有り染法は熏くんじて迷まよと成り淨法は熏くんじて悟さとと成る悟は即ち仏界なり迷は即ち衆生なり、此の迷悟の二法二なりと雖いまだも然ほつしやうしんによも法性真如の一理なり。

当体義抄（五一二頁）べん 当世の諸人之れ多しと雖も一人を出でず謂いゆる権教の人・実教の人なり而も権教方便べんの念仏等を信ずる人は妙法蓮華の当体と云わる可からず実教の法華經を信ずる人は即ち当体の蓮華・真如しんによの妙体是なり。みやうたい

【示^じ同^{どう}凡^{ぼん}夫^ぶ】

御本仏である日蓮大聖人が、末法に凡夫の姿をもって出現された。これを示同凡夫という。

御義口伝下（七六六頁） 末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり、法とは題目なり僧とは我等行者なり、仏とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり。

仏が凡夫と同じ姿を示し、自ら凡夫即極の現証をあらわして、その範をもたらされるのである。民衆を化導するためには相手の社会へ飛び込んでいかなくてはできない。悪人の社会を導くにしても、自ら悪人の姿をもって悪人の社会へはいらなくては不可能である。また日蓮大聖人が立派な姿をして大邸宅に住まれ、何一つ不自由なき生活を一生の間送られていたとするなら、貧窮^{びんぐう}下賤^{げせん}のわれわれが日蓮大聖人の教えによって幸福になれるとは考えられない。

すなわち、われわれの折伏にあつても、自分自身が貧乏で悩み病気で苦しんでいたのが、御本尊の功德によつて救われたからこそ、無智の大衆も御本尊の功德を信じられるのである。以上のような道理から日蓮大聖人は示同凡夫としてご出現あそばされたことを拝^{あが}すべきである。

佐渡御書（九五八頁） 日蓮も又かくせめらるるも先業^{ぜんご}なきにあらず。

日寛上人はまた示同凡夫について次のように仰せられている。

開目抄文段（富要四卷三二六頁）には、開目抄下巻の末に、日蓮大聖人の逢難と迫害する者が逆に安穩^{あんゑん}なる

ことを示して、その理由は日蓮大聖人に宿謗（前世の謗法）があるゆえに現世の応報であるとされ、しからば本仏になぜ宿謗があるのかとの問いに対して「示同凡夫の辺に拠る」ゆえであると仰せられている。

観心本尊抄文段（富要四卷二三三六）では、観心本尊抄に「夫れ智者の弘法三十年・二十九年の間は云云」とあるご文中、二十九年は恐らく二十七年の誤りであろう、もし日蓮大聖人のご正筆が二十九年となっているとしても、日蓮大聖人は示同凡夫のゆえに不慮の書き誤りがあっても当然である。その例は他の御書にもあると仰せられている。

【如来秘密神通之力^{によらいひみつじんずうしりき}】

如来秘密神通之力とは、法華経如来寿量品の一文である。この文は、無作三身の依文であり、本門の本尊の依文である。三大秘法の御本尊のみが、一切衆生を即身成仏させてくださる如来秘密神通之力をもっておられるのである。世の邪宗の行者などが神通力をもつわけではないのである。

法華経如来寿量品第十六 爾の時に世尊、諸の菩薩の、三たび請じて止まざることを知しめして、之に告げ^{のたま}て言わく、汝等諦かに聴け、如来の秘密神通の力を。^{なんだちあきら}

如来とは、仏であり、久遠元初自受用身、末法御本仏たる日蓮大聖人であられる。秘密とは「一身即三身なるを名づけて秘となし、三身即一身なるを名づけて密となす」また「昔より説かざる所を名づけて秘となし、唯仏のみ自ら知しめしたもうを名づけて密となす」と。すなわち仏の甚深の働きをいうのである。神通之力と

は、神は法身、通は報身、力は応身である。これ無作の三身の依文たるゆえんである。すなわち、神通之力とは、御本仏の偉大なるお力をいうのである。

御義口伝下（七五二頁） 第二如来秘密神通之力の事。御義口伝に云く無作三身の依文なり、此の文に於て重重的の相伝之有り、神通之力とは我等衆生の作發と振舞う処を神通と云うなり獄卒の罪人を苛責する音も皆神通之力なり、生住異滅の森羅三千の当体悉く神通之力の体なり、今日蓮等の類いの意は即身成仏と開覚するを如来秘密神通之力とは云うなり、成仏するより外の神通と秘密とは之れ無きなり、此の無作の三身をば一字を以て得たり所謂信の一字なり、仍つて經に云く「我等当信受仏語」と信受の二字に意を留む可きなり。

諸法実相抄（一三五八頁） されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華經こそ本仏にては御座候へ、經に云く「如来秘密神通之力」是なり、如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身にして迹仏ぞかし、凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり。

三大秘法抄（一〇二二頁） 寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり、寿量品に云く「如来秘密神通之力」等云云。

【自受用身の勝劣】

自受用身とは仏自身の働きによって、一切の衆生を救うために、みずから出現された仏をいう。他受用身に

対する。

寿量品において五百塵点劫顯本の釈迦仏は自受用身であり、他受用身ではない。しかし文上の釈尊は、衆生の機にしたがって応現し、昇進した応身仏に過ぎぬから応仏昇進の自受用身と呼ぶ。

それに対して、日蓮大聖人は、すべての仏法の根源である妙法をもともと所持されていた御本仏であられるから、久遠元初の自受用身という。その相違は天地の勝劣があり、略してこれをあげると次のごとくなる。

(末法相応抄・富要三卷一七六頁)

一に本地と垂迹、二に自行と化他、三に名字凡身と色相莊嚴、四に人法体一と人法勝劣、五に下種の教主と脱益の化主。以上の五個は、われわれの実生活にあてて、さらに深く思索すべき点である。

【本因の境智行位】

天台大師は法華玄義に、迹門の十妙、本門の十妙を説いた。迹門の十妙とは境・智・行・位・三法・感応・神通・説法・眷属・利益である。本門の十妙とは本因・本果・本国土・本感応・本神通・本説法・本眷属・本利益・本涅槃・本寿命である。天台の説く境・智・行・位は、もとより釈尊の法華経を解釈したものであるが、末法に流布する本因妙下種仏法の境智行位は、次のごとく御書にお示しになっている。

三世諸仏総勘文教相廢立(五六八頁) 釈迦如来・五百塵点劫の当初・凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき。

右の御文で、凡夫はすなわち名字即で位妙、知の一字は能証のうしょうの智で智妙、また以信代慧いしんたいえのゆえに知は信にあり、信心は題目の修行となるゆえに行妙である。我が身等は境妙であり、すなわちこれが本因妙下種家の境智行位である。

当体義抄（五一三頁） 聖人此の法を師と為して修行覺道かくどうし給えば云云。

聖人とは名字即の釈尊で位妙、此の法を師と為すとは境妙、修行には始終があり、始はすなわち信心で智妙、終はすなわち唱題で行妙となり、この四妙を合して本因妙となすのである。

【初住位しよじゆういの本因ほんいんと久遠元初くおんがんじよの本因ほんいん】

天台大師は瓔珞經ようらくきやうによって、別教・円教の菩薩の位を五十二位に分けた。いわゆる十信・十住・十行・十回え向・十地・等覺とうかく・妙覺みょうかくである。十住の初めの位を初住といい、不退の位としている。

また天台大師は法華文句の九に、法華經壽量品の「我本行菩薩道がほんぎやうぼさつどう」の文を解釈して、本因初住としている。すなわち壽量品には三妙合論が明かされ、「我実成仏已来がじつじやうぶつらい」は本果妙、「娑婆世界說法教化しやばせかいせつぽうきやうけ」は本国土妙、

「我本行菩薩道」を本因妙の文としている。この「我本行菩薩道」についても、十信はいまだ不退の位にあらずとし、初住位において初めて不退の位とし、すでに常壽を得たりと説いている。これが本因初住である。

しかるに、日蓮大聖人の仏法においては、久遠元初の本因妙を立て、天台の初住の本因と嚴格げんかくに區別される。すなわち名字凡夫位において直達正觀じきだつしやうかんの事行の一念三千を説くのである。

開目抄上（一八九頁） 一念三千の法門は但法華經の本門・壽量品の文の底にしづめたり。

しからば、事行の一念三千の法門は、壽量品のいずれの文の底に沈められたかといえ、古来多くの邪義があつたが、唯一の相伝家・日蓮正宗では、次のように正義を明かしている。

三重秘伝抄（富要三卷五〇頁） 師の曰く「本因初住の文底に久遠名字の妙法・事行の一念三千を秘沈したまへり」云云、応に知るべし、後々の位に登るは前々の行に由るなり云云。

しかして、本因初住とは、

撰時抄文段（富要四卷三四六頁） 五百塵点劫は本果の所証なり、復倍上数は本因の初住なり、復倍上数の当初は本因の所証なり。

すなわち、われらは、この本因初住の文底に秘し沈められた三大秘法によってのみ、即身成仏がかなうのである。

本因妙抄（八七七頁） 文の底とは久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず直達の正観・事行の一念三千の南無妙法蓮華經是なり。

【随縁真如の智】

真如とは、中道、法性、実相、生命等をいい、真如の体性は永遠に変わらないが、縁に随つて種々の相を起す。これを随縁真如の智といい、変わらない性を不変真如の理という。

たとえば、天の月の実体は不変真如であり、雲によって相の変わる天月は随縁真如である。また、われわれの変わらざる生命は不変真如であり、染浄せんじようの二法で変わる生命の姿は随縁真如である。

また、本迹相對すれば、迹門は不変真如の理に帰し、本門は随縁真如の智といえる。

御義口伝上（七〇八頁） 帰と云うは迹門不変真如ふへんしんによの理に帰するなり命とは本門随縁真如ずいえんしんによの智に命もとすくなり。

御義口伝上（七一〇頁） 火の二義とは一の照は随縁真如ずいえんしんによの智なり一の焼は不変真如ふへんしんによの理なり。

御義口伝上（七二九頁） 雖一地所生一雨所潤等すいいちじしよしよいういちう しよにんの事。御義口伝に云く随縁不変ずいえんふへんの起る所の文なり、妙樂大

師云く「随縁不変の説は大教より出で木石無心の言は小宗より生ず」と。

【本ほん仏ぶつ論ろんの遮しや難なん】

日蓮大聖人を本仏とあおぐことは日興上人以来、富士門流の教義および信仰の肝心かんじんであり核心であるが、近年にいたって他門流では、それが後世の創作であり、特に日寛上人が創始したかのごとき説をなすものがある。そもそも日蓮大聖人が末法の御本仏であられることは、日蓮大聖人ご自筆の御書をもっても明らかであるが、日寛上人以前の宗門において日蓮大聖人を本仏とあおいでいた二、三の証拠をあげ、もってこれを明らかにしよう。

日興上人はご在世当時より、身をもって御本仏日蓮大聖人に常随給仕じようずいきめうじされたことは疑う余地のない史実である。しかして日興上人はどのように日蓮大聖人を敬称されていたかについて、ご自筆のご書状からうかがうと

次のようになってゐる。なお、これらのご書状は御供養の品を日興上人が仏前に供えて報恩の意を表されたとお手紙である。（堀日亨著「富士日興上人詳伝」より）

「本師」と呼ばれたもの一通

「聖人」と呼ばれたもの十二通

「御影」と呼ばれたもの一通

「聖人御影」と呼ばれたもの四通

「法華聖人」と呼ばれたもの七通

「法主聖人」と呼ばれたもの一通

「御経日蓮聖人」と呼ばれたもの一通

「仏」と呼ばれたもの一通

以上のごとく、御供養のお札などにあたって釈迦仏法中の仏菩薩を、一切おしるしにならず、ただひたすら日蓮大聖人御一人に対して仏の礼をとられたことが明らかである。また日興上人ご自身が第二祖として、日蓮大聖人の仰せのままに願わされた御本尊は二百数十幅が現在厳存し、決して一体も釈尊像などは作っていないのである。

三位日順 本因妙口決ほんにんみょうくけつ（富要二巻八三頁）

久遠元初自受用報身とは本行菩薩道の本因妙の日蓮大聖人を久遠元初の自受用身くおんがんだいよじじゆうしんと取り定め申すべきなり。右の日順師は身延派を捨てて日興上人に帰依きえした人である。

日眼 五人所破抄見聞（富要四卷一ツ）

威音王仏いおんのうぶつと釈迦牟尼とは迹仏なり、不軽と日蓮とは本仏なり。

化儀抄（富要一卷七七ツ）には、また次のごとく明らかに、日蓮大聖人を本仏とあおぐべしと仰せられている。

今日の寿量品と云うも迹中の寿量なり、乃至本門は如何と云うに久遠の遠本・本因妙それの所なり、夫とは下種の本なり……当宗には……釈迦をば本尊には安置せざるなり、乃至釈迦の因行を本尊とするなり、其の故は我等が高祖日蓮聖人にて在おほすなり。

そのほか参考に示せば、日興上人の教えをうけた秋山孫次郎の譲り状には「御仏大上人」と述べられており（大白蓮華第三十八号、六ツ）、また家中抄けちゆうしやうには、日興上人が本因妙抄ほんにんみやうしやうを日目・日代・日順・日尊に伝えられたとある。これらはすべて日寛上人以前の出来事ではないか。

【御義口伝おんぎくでん】

御義口伝は、日蓮大聖人のご内証の立ち場よりの法華經の講義を、第二祖日興上人が筆記されて、日蓮大聖人のご印可を得たものである。御義口伝には、日蓮大聖人の文底下種の法門が明かされており、まことに重要な御書である。

同じく日蓮大聖人の法華經の講義を聞いて日向の書き残した御講聞書（日向記ともいう）と比べると、内容に天地の開きがある。これは、いかに日興上人が師の教えの奥底おくていをくみとっていたか、教学においてすぐれて

いたかということが、明白にわかるのである。

御義口伝は上下二巻に分かれている。巻上には序品の七箇の大事から涌出品一箇の大事まで収められている。巻下には寿量品廿七箇の大事から普賢經五箇の大事まで、および別伝として廿八品に一文充の大事、廿八品悉く南無妙法蓮華經の事等が収録されている。

御義口伝は、初めに天台大師の法華文句を引き、次に「御義口伝に云く」という述べ方で、日蓮大聖人の甚深の法門が明かされている。巻上の最初には、南無妙法蓮華經について、詳しく説かれ、上下巻を通じて珠玉のごとき御書である。

一代五十年の説法、五千、七千巻の仏教典ありといえども、法華經こそ釈尊の出世の本懐の經典であり、古来、幾多の人師・論師の解釈があるが、像法の天台大師は、釈迦仏法の立ち場で、最もよく説ききった。しかし、末法の御本仏日蓮大聖人は文底の立ち場から、さらに深奥より完璧の解釈をなされた。これが御義口伝である。御義口伝巻下の初めの「第一南無妙法蓮華經如来寿量品第十六の事」という御文は、はっきりと天台流の法華經と峻別して雲泥の法門の差のあることを示しているのである。

次に御義口伝のなかの有名な文証を、二、三あげてみよう。

御義口伝上（七〇八頁） 色心不二なるを一極と云うなり。

御義口伝上（七三五頁） 本迹二門は酒なり南無妙法蓮華經は醒めたり。

御義口伝下（七五二頁） 今日蓮等の類いの意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那なり、されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり。

御義口伝下（七五三頁） 当品（寿量品）は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計りばか当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後しかは下種なり仍て下種を以て末法の詮せんと為す。

御義口伝下（七六〇頁） 本尊とは法華經の行者の一身の当体なり。

御義口伝下（七六六頁） 末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり、法とは題目なり僧とは我等行者なり、仏とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり。

【我が身即妙法蓮華經】

宇宙を構成する要素を地水火風空の五種とし、この五種はまた妙法蓮華經であり、一切の万物はすべてこの五種類の要素で成り立っている。ゆえに人間の賢愚の差や時代の別なく一人残らず妙法蓮華經の当体である。

三世諸仏總勘文教相廢立（五六八頁） 五行とは地水火風空なり五大種だいしゆとも五蘊おんとも五戒とも五常とも五方とも五智とも五時とも云う、只一物・經經の異説なり内典・外典・名目の異名なり、今經に之を開して一切衆生の心中の五仏性・五智おつしやうの如來にやらいの種子と説けり是則ち妙法蓮華經の五字なり、此の五字を以て人身の体を造るなり本有常住ほんぬじやうじゆうなり本覺ほんかくの如來なり。

御義口伝上（七一六頁） 我等が頭は妙なり喉は法なり胸は蓮なり胎は華なり足は經なり此の五尺の身妙法蓮華經の五字なり。

御義口伝下（七六七頁） 塔婆とうばとは五大の所成しよじやうなり五大とは地水火風空なり此れを多宝の塔とも云うなり。

【直達正観】じき たつ しょう かん

「直ちに正観に達する」意である。爾前経では歴劫修行を立て、菩薩が六度万行を永遠に修していくのが成仏の道であると説いた。しかして法華経の序分・無量義経では「速疾頓成」を説いて歴劫修行を否定し、提婆品では童女の即身成仏があらわれて現証を示し、寿量品の最後にも「速成就仏身」と衆生の即身成仏を説いている。

しかし釈迦仏法では熟益・脱益の機根の衆生が対象であり、法門もやはり熟脱の法門である。末法における文底下種仏法は、御本尊を受持して題目を唱え即身成仏する。それ以外の一切の経や仏では成仏できないし、またそれ以外の一切の修行を用いない。これが直達正観である。

御講聞書（八二九頁）速疾頓成の義を忽と云うなり。
ほんにんみょうしょう 速疾頓成の義を忽と云うなり。
本因妙抄（八七七頁）文の底とは久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず直達の正観・事行の一念三千の南無妙法蓮華経是なり。

【福十号に過ぐ】ふくじゅうごう す

十号とは仏の十種の尊称であり、如来・応供・正徧知・明行足・善逝・世間解・調御丈夫・天人師・仏・

世尊という。舍利弗^{しゃりふつ}や迦葉^{かしょう}等の声聞は、法華經の迹門に未来の成仏^{じやうぶつ}を許されて、皆この十号を授けられたのである。

以上あげた十種の徳力のうち、第六の世間解を無上士と世間解の二つに開いて、第九の仏までを十号と称し、この十号をそなえた者を総称して世尊というとする説もある。十号の大要は次のとおりである。

①如来。森羅万象^{しんらばんしやう}の本源を知り、因果の理法にのっとって、真実の永遠の生命觀を体得した者をいう。

②応供^{おうく}（応受供養）。人天の供養をうけるに足る者。

③正徧知^{しやうへんち}（正等覺）。一切の智をそなえていて、万法を明らかに理解する者のこと。また、あらゆる人を平等に無上の境地へ導き入れる者をいう。

④明行足。過去、現在、未来の三世を達觀し、一切の善行を修して満足する者をいう。

⑤善逝^{ぜんし}（好去）。無量の智慧をもって、種々の煩惱^{ぼんのう}を断じ尽くし、よく仏の境地に到達する者をいう。

⑥世間解。万象の因果の理法をさとりつくす者をいう。種々の迷いを断じ尽くし、衆生のなかでこのうえなくすぐれているので、無上士^{むじやうし}ともいう。

⑦調御丈夫。大丈夫の力用をそなえ、さまざまな法を説き、一切衆生を調伏^{せうふく}制御して、仏道を成ぜしめる力用をそなえている者。すなわち、智慧、勇氣をもち、多数の民衆を幸福へ導く大指導者のこと。

⑧天人師。万人の師として指導しきれる者をいう。

⑨仏^{ぶつだ}（仏陀、智者^{ちしや}、覺者^{かくしや}）。智徳円満なる者をいう。

⑩世尊。あらゆる人から尊敬される者。また世間の英雄という意味で、仏を世雄ということもある。

しかるに妙樂大師は「供養する有らん者は福十号に過ぐ」といって、末法に日蓮大聖人の仏法を信ずる者の功德を賛嘆さんたんしている。これに対して日蓮大聖人は、次のように仰せである。

法蓮抄（一〇四四） 是れ程に貴き教主釈尊を一時二時ならず一日二日ならず一劫が間たなごころ掌を合せ兩眼を仏の御顔にあて頭を低たれて他事たじを捨て頭の火を消さんと欲するが如く渴かつして水ををもひ飢うえて食しょくを思うがごとく間ひま無く供養し奉る功德よりも戲論けろんに一言繼母けいぼの繼子けいしをほむるが如く心ざしなくとも末代の法華經の行者を讃ほめ供養せん功德は彼の三業相應の信心にて一劫が間生身の仏を供養し奉るには百千万億倍すぐべしと説き給いて候、これを妙樂大師は福過十号とは書かれて候なり、十号と申すは仏の十の御名みななり十号を供養せんよりも末代の法華經の行者を供養せん功德は勝るとかかれたり。

このように、われわれ末法の衆生の御本尊による功德がすぐれることは、脱益の釈迦仏法に対して、本因下種の日蓮大聖人の仏法が百千万億倍すぐれているからであり、「末法の本仏」「本門戒壇の大御本尊」「種脱相對」等の項を参照すれば明らかである。

【宿縁深厚しゆくえん じんこう】

凡夫の身として、この世に生まれてきたわれわれが御本尊の信仰にはいることができ、しかも現世に即身成仏することは、過去世の宿縁じんこうが深厚であるがゆえである。

呵責かしやく謗法滅罪抄ほうぼうめつざいししょう（一一二六） 妙樂大師の釈しやくにいわく七記「故に知んぬ末代一時も聞くことを得聞おわき已おつて

信を生ずる事宿種なるべし」

諸法実相抄（一三六二頁） まことに宿縁のをふところ予が弟子となり給う。

法華証明抄（一五八六頁） 末代の凡夫の身として法華經の一字・二字を信じまいらせ候へば十方の仏の御

舌を持つ物ぞかし、いかなる過去の宿習にて・かかる身とは生るらむと悦びまいらせ候。

そのほか、このような類文はたくさんあるが、宿種・宿縁・宿習と同じ意味に用いられている。すなわち

過去世に日蓮大聖人の眷属として御本尊を信仰してきたとの意である。普通に宿縁とか宿習という場合は御本尊に限らないのであるが、前引の御文はすなわち以上に解説したとおりである。

このようにして現世において修行を励むならば、未来はまた師弟ともに仏国土に生まれ、また夫婦・親子も共に幸福な生活を永遠に続けることができるのである。

秋元殿御返事（一〇七〇頁） 「在在諸の仏土常に師と俱に生れん……」との金言違ふべきや。

上野殿母御前御返事（一五七〇頁） 乞い願わくは悲母我が子を恋しく思食し給いなば南無妙法蓮華經と唱えさせ給いて・故南条殿・故五郎殿と一所に生れんと願はせ給へ、一つ種は一つ種・別の種は別の種・同じ妙法蓮華經の種を心に・はらませ給いなば・同じ妙法蓮華經の国へ生れさせ給うべし。

【草木成仏】

草木や土砂等の非情の物質が成仏する、これを草木成仏という。塔婆供養も草木成仏の原理によるのである。

る。一念三千のうえから論ずれば、われわれの一念に十界・百界を具し、また千如是を具するとは有情の範圍であり、さらに衆生世間・五陰世間ごおんを具すると共に、国土世間を具する。この国土世間とは依報えほうであり、衣類や土地・家・町村・国等がすべて成仏するとの教えである。しかも草木成仏は一往釈迦仏法にもあるが、再往の実義は文底下種仏法に限るのである。これらに関する御書を拝すれば、

四条金吾釈迦仏供養事（一一四五頁） 国土世間と申すは草木世間なり、草木世間と申すは五色絵具のゑのぐは草木なり画像これより起る、木と申すは木像是より出来す、此の画木に魂魄こんぱくと申す神たましいを入る事は法華經の力ちからなり天台大師のさとりなり、此の法門は衆生にて申せば即身成仏といはれ画木にて申せば草木成仏と申すなり。

右の御文に「法華經の力」とあるは、文底下種事行の一念三千の大御本尊である。すなわち觀心本尊抄（二四六頁）に「詮ずる所は一念三千の仏種に非ずんば有情の成仏・木画二像の本尊は有名無実みょうむじつなり」と仰せられ、開目抄上（一八九頁）には「一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり」とご判定あそばされている点から明らかである。

また日寛上人は諸御書を案ずるに草木成仏に二意有りとなされて、一には不改本位ふかいほんいの成仏、二には木画二像の成仏であるとされている（觀心本尊抄文段上・富要四卷二三五頁）。その大要を左に述べる。

一に不改本位の成仏とは、草木の全体がそのまま本有無作の一念三千即自受用身の覺体かくたいである。その意味は次の諸御書に明らかである。

草木成仏口決（一三三九頁） 口決に云く「草にも木にも成る仏なり」云云、此の意は草木にも成り給へる

寿量品の積尊なり。

三世諸仏総勘文教相廢立（五七四頁） 春の時来りて風雨の縁に値いぬれば無心の草木も皆悉く萌え出生して華敷き榮えて世に値う気色なり秋の時に至りて月光の縁に値いぬれば草木皆悉く実成熟して一切の有情を養育し寿命を續き長養し終に成仏の徳用を顯す之を疑い之を信ぜざる人有る可しや無心の草木すら猶以て是くの如し何に況や人倫に於てをや。

御義口伝下（七八四頁） 森羅万法を自受用身の自体顯照と談ずる故に……桜梅桃李の己己の当体を改めずして無作三身と開見すれば是れ即ち量の義なり。

三世諸仏総勘文抄に仰せのように、無心の草木でありながら、その体は本覺の法身であり、その時節をたがえず花咲き実のなる智慧は本覺の報身であり、有情を養育するは本覺の応身である。これを不改本位の成仏という。

二に木画二像の成仏とは、最初に引く釈迦仏供養事にお示しのとおりであり、また次の御書に明らかである。木絵二像開眼之事（四六九頁） 法華經を心法とさだめて三十一相の木絵の像に印すれば木絵二像の全体生身の仏なり、草木成仏といへるは是なり。

【垂迹と再誕】

垂迹とは、本地に対する言葉。「迹を垂れる」と読む。仏が衆生を利益するために種々のところに応化身を

示すことをいう。初發得道の最初を本地といい、化他面にあらわれる時は化權となり垂迹となるのである。垂迹は本地の影であり働きである。つまり本地と垂迹は天月と水月との関係にある。

諫曉八幡抄（五八八頁）諸の權化の人々の本地は法華經の一実相なれども垂迹の門は無量なり、所謂跋俱羅尊者は三世に不殺生戒を示し驚崛摩羅は生生に殺生を示す、舍利弗は外道となり是くの如く門門不同なる事は本凡夫にて有りし時の初發得道の始を成仏の後、化他門に出で給う時我が得道の門を示すなり。

諸仏、菩薩の場合は釈迦を本地とする垂迹であり、釈迦の場合は五百塵点劫の当初すなわち久遠元初があらわれると、釈迦の本地が垂迹となり化他のための応身仏となる。日蓮大聖人の場合は、本地は久遠元初の自受用身であり、それ以後の仏・菩薩は五百塵点劫の仏をはじめとして垂迹化他となる。

ゆえに百六箇抄（八五四頁）には「久遠名字より已來た本因本果の主・本地自受用報身の垂迹上行菩薩の再誕・本門の大師日蓮」とある。

末法今時においては、三大秘法の本尊を受持する者の本地は、仏の本眷属たる地涌の菩薩である。そして現在さまざま姿で信仰活動に励んでいることは垂迹の姿である。

本因妙抄（八七二頁）には「今日熟脱の本迹二門を迹と為し久遠名字の本門を本と為す、信心強盛にして唯余念無く南無妙法蓮華經と唱え奉れば凡身即仏身なり」とある。

再誕とは、ある前世があつて、再びこの世に生まれてくること。末法においては、日蓮大聖人は、外用は上行菩薩の再誕であり、その内証深秘の辺は久遠元初の自受用報身如来の再誕である。ゆえに百六箇抄（八五四頁）に「本地自受用報身の垂迹上行菩薩の再誕・本門の大師日蓮」とある。この文について日寛上人は、文底

秘沈抄（富要三卷七七頁）に「問う久遠元初の自受用身とは即ち是れ本因妙の教主釈尊なり、而るに諸門流一同の義に曰く『蓮祖は即ち是れ本化上行の再誕』と云云、其の義文理分明なり処々に之を示すが如し、今何ぞ蓮祖を久遠元初の自受用身と称し奉るや、答う外用淺近は実に所問の如し、今は内証深秘の故に自受用報身の再誕と云うなり」と仰せられ、さらに「本地は自受用身、垂迹は上行菩薩、顕本は日蓮なり」と決定されている。また百六箇抄（八六三頁）には「久遠元始の天上天下・唯我独尊は日蓮是なり」とあり、同じく百六箇抄（八六四頁）には「久遠の釈尊の修行と今日蓮の修行とは芥子計も違わざる勝劣なり云云」とある。この文は日蓮大聖人こそ久遠元初の自受用報身如来であられることを示している。次に総じていえば、創価学会員は地涌の菩薩の再誕である。諸法実相抄（一三六〇頁）に「日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事あに疑はんや……末法にして妙法蓮華經の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱えがたき題目なり」とある。ここに仰せのように日蓮大聖人の教えを信じ題目を唱える創価学会員は、地涌の菩薩の再誕である。

仏や菩薩のとる姿には、再誕の外に後身、化身、分身、垂迹、内証と外用等がある。後身は再誕とほぼ同義。化身は活動や化導において、さまざまな姿をとること。分身は大御本尊とその他の御本尊、久遠元初の御本仏と三世十方の諸仏などの関係にみられるように本体とは別だが、本体あつての分身として意味をもつ。垂迹は本地に対する言葉で、本体の影であり働きである。内証は本地と同じ、外用は衆生の機根に応じて、教義や經文に沿って一応の姿を示すこと。その他に菩薩の示現生がある。これはなにかの目的をもって、菩薩が鳥獸等の姿をとって出現することである。